

求道

第拾叁卷
第一號

一 月 號

■一向專修の意義「一向專修と近時の神社問題」

■夢幻の人生と眞實の如來

■釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

■求道會館落慶式始末

■求道會館落慶式講演「井上博士、高楠博士、南條博士」

大正五年一月十日發行（毎月一回十日發行）

大正五年二月五日第三種郵便物認可

求道第拾參卷第壹號目次

▼夢幻の人生と眞實の如來

▼一向專修の意義

一向專修と神社問題
一向專修の信仰

▼現代青年の煩悶に同情す

▼求道會館落慶式報告講演速記

挨拶	長尾 收 一
經過報告	萩野 伸三 郎
會計報告	西澤 善 七
演 說	井上 圓了 氏
演 說	高楠 順次 郎 氏
演 說	南條 文雄 師

▼求道會館落慶式始末

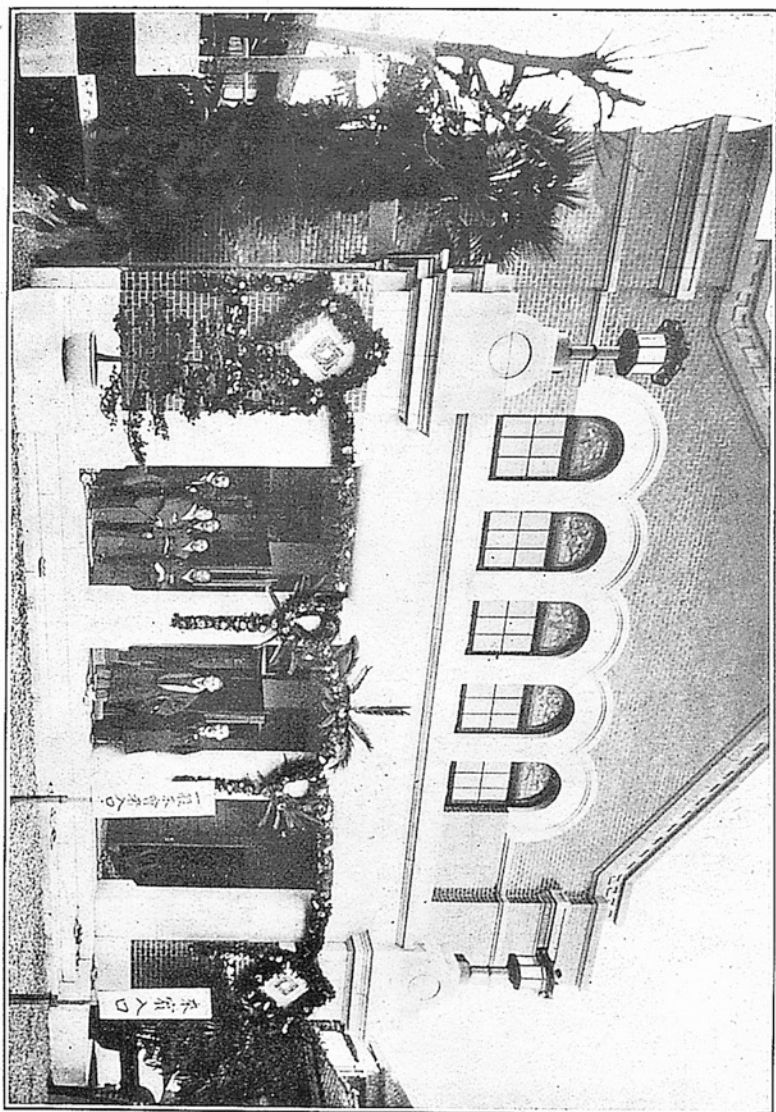
▼釋迦嚴父の抑止、彌陀慈母の引接

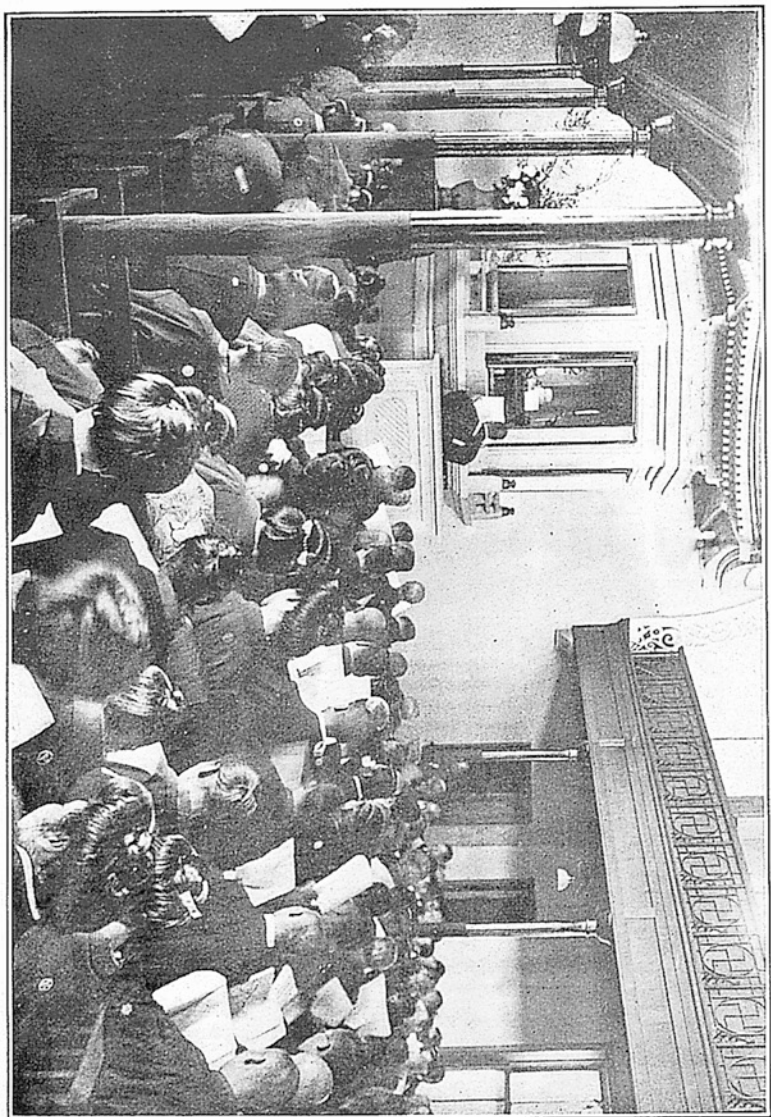
近 角 常 觀

大經五惡段の説法 抑止の文と親鸞聖人——眞宗の人に抑止の意味が徹して無い「善くなりた」と悪くてもよい」と

前 號 要 目

徹底せる信仰と嚴正なる秩序	思想問題の研究	人生の動亂	法律主義	放縱主義	絕對主義	求道の文字につきて	遠慮なき告白	『教行信證』信卷講話	第九席 願成就釋	切迫せる現下の思想問題	信仰と實人生	一、法律主義と自然主義	二、信仰より来る人生觀	求道會館建築經過	會館構造概況
						近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀	近 角 常 觀





夢幻の人生と眞實の如來

現代の社會は夢幻の人生に執着し過ぎて居る、否吾々凡夫として此人生に執着して居ることは昔も今も變らぬのである。たゞ此人生に執着することによりて、眞實なる人生を求めんとするとは全然方角を間違へて居る。眞實なる人生々活は、人生の夢幻なることを覺了して初めて眞實の人生は來るのである。否寧ろ此人生は徹頭徹尾夢幻であるか故に、之を憐みまします如來の眞實がましますのである、人生が夢幻なるが故に眞に之を悲愍しまして、無明の大夜を照さんが爲に、盡十方無碍光如來が影現されましたのである。之を救済せんがために法性自然の報土を建立したまひたのである、之を化度せんが爲に煩惱の林に遊び、生死の菌に入りて益物度生きはまりないのである、人生は生老病死の苦海なるが故に、大悲の願船しまして我を喚びて乗

せたまふのである。

大經の偈に曰く、一切の法は猶し、夢と幻と響との如しと覺了して、諸の妙願を満足して必ず是の如きの刹を成ぜん。法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具して、受決して當に作佛すべし。諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨佛土を求めて、必ず是の如きの刹を成ぜんとある。實に人生は夢であり、幻である、夫を憐みたまふが如來の眞實である。實に人生は罪惡であり、煩惱である、夫を憐みたまふが佛陀の眞實であり、清淨である。人生は闇黒であり、無明である、夫を照したまふが無碍光であり、清淨光であり、歡喜光であり、智慧光である。實に如來は闇黒なる人生の光明である、夢幻の人生を喚び覺さまさんがために、一如法界の境界より來現ま

しましたる眞實大悲の父母にてましますのである。

如來は一切の爲めに、常に慈父母と作りたまへり、當に知るべし諸の衆生は、皆是如來の子なり、世尊大悲、衆の爲に苦行を修しまたふことは、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し、我等衆生は煩惱の爲に狂はされて、凡夫顛倒の所爲を爲しつゝあるのである。之を觀をなはす如來大悲の眞實は、起ても居ても安んじたまはぬのである。佛かねてしるしめして煩惱眞足の凡夫と仰せられたが實に我等の事である。其やるせなき御心より五劫思惟の本願をたてたまひたのである、兆載永劫の苦行を修したまひたのである。實に五劫の思惟も兆載の修行も、たゞ親鸞一人がためなりけりといふは、實に此如來大悲の眞實の親心をいたゞかれたる信相である。

茲に信仰問題につきて大に注意すべき事がある。私が罪深いために如來様に御苦勞を掛ける、親様に心配をかけるといふて却て、夫がために苦しむものが多い、

宅無常である、煩惱是足である、たゞ念佛のみぞまことである、念佛成佛是眞宗、萬行諸善是假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ。吾等の期するところは自然の淨土である、五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてて、自然の淨土にいたるなれ。信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず。唯々やるせなき如來眞實の本願力自然に牽かれて、念佛成佛自然にいたゞくが、如來廻向の御力である。かくて自然の淨土に往生して自然のさとりをひらくのである。

歎異鈔に曰く、口には願力をたのみたてまつるといひて、心にはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまはんずれとあもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいるところかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきあもひたまふべきことなり、

夫は大に方角違ひである。親の苦むのは子の苦を減ぜんためである、否親の苦むといふは、苦く思ふて苦むのではない、子の苦むのをいたはるのである。親の狂亂は子の狂亂を憐む心のあらはれてである。夫程の親の心をいたゞけば、狂ふ心も安らき、煩惱の心も融けるのである。借金に苦しむものを憐みて、引受けてやらうといふ聲をきいて、其心切に對してすまぬといふて苦しむものがあつたならば、夫は借金を引受けて貰ふたのではない、却て恩誼や人情につまされて苦むのである。如何に借金が多からんとも、如何に煩惱熾盛にても、皆是れ狂亂の所爲なりとて、飽まで憐みたまふが如來大悲の眞實である。此眞實をいたゞくが眞宗である、即念佛成佛是眞宗である。若し少しにても自ら清くすることによりて、自ら眞實にすることによりて、自ら斷惡修善することによりて、如來の御心に協はんと思ふならば夫は不可能である、萬行諸善是假門である。人生は唯夢である、幻である、そらごとたはごとである、火

信心さだまりなば、往生は彌陀にまかせまゐらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけても、いよく願力をあふぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のころもいてくべし。すべて往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれと彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひいたしまゐらすべし、しかれば念佛もまうされさふらふ、これ自然なり、わがはからはざるを自然とまうすなり。是すなはち他力にてましますと。

本願力も自然である、信心開發も自然である、念佛成佛も自然である、柔和忍辱も自然である、火宅の利益も自然である、往生も自然である、淨土も自然である、さとりも自然である、淨土の莊嚴も自然である。自然快樂の音聲である、自然の徳風が念佛念法念僧の聲をなすのである、唯佛與佛の知見である、虛無之身無極體である、畢竟逍遙として有無を離るゝのである。自然に還相廻向の利益があらはるゝのである。覺めた

るものは眠れるものを呼び覺まさずには居られぬのである、醒めたるものは醉へるものを憐まずには居られぬのである。彌陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものなれば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益すること、釋尊の如くにして、自由自在に蘭林遊戲の徳を修すること自然である。是實に五濁惡時惡世界中に於て、本願圓頓一乘のます／＼顯現する所以である。

一向專修の意義

一向專修と神社問題

○近時神社崇拜とか、標繩問題といふ様なることが随分八ヶ間敷問題になつて居る、是は畢竟眞宗に於ては、俗に一向宗と呼ぶ位にして、彌陀一佛を一向に信じ、念佛一行を專修するを以て特色とする位なるゆへ、近時

和讃に曰く、南無阿彌陀佛の廻向の、恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり。往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう、如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせん。彌陀觀音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ。是夢幻の人生中に於て如來眞實の大海より化現して、一念及び一時に無垢莊嚴光を放ちて、益物度生したまふ恩徳である。

の如き神道的氣分の漲りたる世には、此の如き問題の起るも無理なきと思ふのである、されど徹底したる此問題の解決もなき様であるから、聊か根本的に一向專修の意義を明らかにして見たいと思ふ、されど固より時事問題を解決するためではなくして、寧ろ之を機

會として、信仰問題として、一向專修の意義を明らかにして見たいと思ふのである。

○全體神社崇拜問題や、標繩問題の如きは、地方當局者も又之に對する眞宗信者の態度も、大人氣なき次第である、地方當局者も此等の風習如何程の意義ある者かを考へたならば、左程に迄之を強制して國體呼ばはりをする程の事でもあるまい、又眞宗信者としても、信仰的に一向專修の意義を服膺するならば、左程に反抗運動を起さねばならぬ程の事でもあるまい、要するに何れも形式に囚はれたる問題に過ぎない、之を思想的に批評せば、此等の問題は所謂律法主義の立場より起りたるものにして、全體近時神社崇拜の風習を盛ならしめたる根元は、此等の方法によりて思想上統一せんと欲する動機より起りたるものと見ねばならぬ、即ち此儀式によりて律法的に統一せんと欲するのであるが、是が全體無理なる注文である、思想上の統一は國民として是非なければならず、實に刻下の大問題である、

然れども之を神道的儀式の強行の下に實現せんとする如きは、實に淺薄なる政策と云はねばならず、又之を以て實現し得べきものと思ふならば大なる誤である。

○併し此に誤解なき様に、大に注意を拂はねばならぬ、國民として思想の統一といふとは實に大切なことである、今神社崇拜の強行を以て之を實現せんとすることとは、律法主義の甚だしきものである、寧ろ精神的に統一を見出すことが肝要である、眞宗の一向專修の教義の如きは、精神的統一の上に於ては非常に適切なる者にして、之がために古來大なる意義あるものとなつて居るのである、若し十分に精神的に理解したならば、頻りに神社崇拜を奨励する動機と、一向專修の意義とは矛盾なきのみならず、一向專修によりて眞の目的を達することを得るのである、しかるに其儀式の問題に於て衝突を起して居るといふのが、既に業に徹底せずして形式上の問題となつて居るからである。

○併、律法的といふ批評は爲政當局者に對してのみ加

ふべきではない、眞宗信者の側に對して同様の批評を加ふべきである、如何にも眞宗は一向專修であるが、一向專修であるからといふて、精神上の問題を理解せざる當局者に對して、之を盾として反抗運動を起すべき程の事でない、否一向專修として十分之を信仰的に服膺すれば、神社崇拜位の問題は眼中に置かずして、猶信仰的に盡すべき問題は澤山にある、眞宗の信者側も一向專修を律法主義に盾として、當局者の律法主義に反抗して居る様である、畢竟世間的律法主義と佛法の律法主義との衝突に過ぎない、我等信仰問題を主とするものは、徹底的に信仰の根源より解決するにあらざれば、兩者共に思想統一上に何等の得るところもないことを斷言するのである。

○然らば信仰的に解決したる態度は如何なるものかといふに、御傳鈔にあらはれたる平太郎熊野參詣の時の聖人の御教化に於て盡されてある、聖人は平太郎に對して、一向專念の義は往生の肝腑自宗の骨目なりと

すべし、標繩も張るべし、御札も受くべしといふ様に考へては何んにもならぬ、聖人は一向專念で、念佛一行でやれと仰せられたることなれば、必しも此等の儀式を行へといふのではない、從來の眞宗の掟の如く、決して此等の儀式を行ふ必要はない、此の如き場合は寧ろ一向專修が干要である、併一向專修といふことは、此等の儀式を行はぬといふことが特色にあらずして、信仰的に唯彌陀の眞實をいたぐことである、彌陀の眞實をいたぐて見れば、必ず朝廷の御爲國民の爲念佛すべし、世の中安穩なれ、佛法ひろまれがしといふ積極的態度があらはれて來るのである、神道の儀式や、標繩には及ばぬが、寧ろ積極的態度を以て、篤敬三寶の佛法の見地より御即位を奉祝し奉るべく、國體の擁護もなすべきである、一向專修といふことは其様な窮屈なものではない、此の如き積極的態度を有することを忘れてはならぬ、かく云へばとて世間に順應して働くことを朝家の御爲、國民の爲といふのではない、念佛す

まで仰せられて、一步も曲ぐる餘地なきことを示されてある、されど之を以て熊野に參詣せなとは仰せられぬ、止むを得ずんは參詣しても、内懷虚假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず、一向專修の信仰を以て參詣すべし、而して之が當に一向專修と矛盾せざるのみならず、抑々熊野權現の本意も本地阿彌陀佛の誓約を信じて偏に念佛するにあり、此の如く一向專修することは當に神威を輕しむるにあらず、却て其御本意に協ふ所以なりとの意義である、一向專修が熊野參詣を妨げざるのみならず、一向專修の信仰が却て權現の本懷であるのである、故に一向專修を律法的に主張せずして、精神的に一向專修の意義を服膺せば、必ず眞個國民思想の統一の上に資するところがあるのである。

○併平太郎熊野參詣の問題も、矢張信仰的に理解しなかつたならば誤解に陥り安いのである、平太郎は熊野に參詣したから、世間通途の儀に順して神社にも參詣

べしとあるのを忘れぬやうにせねばならぬのである、併此の如き態度のあらはれ來るにつきては、根本的に一向專修を信仰の上より十分に體得せねば徹底したる解決は不可能である、故に一向專念の教義の根本から説かねばならぬ。

一向專修の信仰

○抑々一向專修の信仰について、消極積極の兩面あることを忘れてはならぬ、世人は一向專修といへば、彌陀一佛を信じて、餘佛餘菩薩を並べず、念佛一行を稱へて諸善萬行を離へざること、云ふことは、何人も了解することであるが、何がゆへに餘佛餘菩薩諸善萬行を離へないのであるかと云ふことを、自覺せねばならぬ。世人が眞宗を以て頗る狹隘なる見地に立ちて、餘佛餘菩薩を排斥するものゝように思ふのは大なる誤解である。然れども如此誤解を招く原因は、又眞宗の信者自身に於て、阿彌陀佛と諸佛菩薩とを相對的に眺めて、

諸佛菩薩は駄目である、阿彌陀佛でなければならぬ、諸佛菩薩を拜んでは阿彌陀佛に對して濟まぬといふ様な、頗る相對的な考を持つて居る嫌がある、それ故根本的に一向專修の信仰的意義を明かにせねばならぬ、先づ一向專修の信仰に於ける消極的方面とも云ふべきは、罪惡觀である、抑々他力信仰の罪惡觀の源は一向專修である、我等か機の深信の起るのは、如來に於て其罪惡を知ろしめして、見捨て給はざる超世無上の本願が源である。

○全體諸佛菩薩の教といふことが、過去七佛通戒の偈文の如く諸惡莫作、衆善奉行である、戒定慧の三學六度萬行を修して廢惡修善をすることである。然るに我等罪業深重にして、如說に修行することが出来ないのて、助かることが出来ないのである。諸佛菩薩の方が惡いのではない、我等が罪業深重である故に何れの行も及ばぬのである。歎異鈔に所謂

事である。歎異鈔に

たとひ念佛はかひなき人のためなり、其宗あさし、いやしといふとも、われらが如く、下根の凡夫一文不通のもの、信すれば、たすかるよし、うけたまはりて、信じさふらへば、さらに上根の人のためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、自分がためには器量およばざれば、つとめがたし、われもひとも生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にておはしませば、御妨げあるべからずとて憎ひ氣せずば、たれのひとかありて、仇をなすべきや、かつはもろくの誣論のところには、煩惱ある、智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。

これ實に我等が、餘佛餘菩薩、餘門余宗に向ひてとるべき態度である、これが即ち一向專修の消極方面である。○然れども此消極的方面に離れずして、積極的方面のあることを忘れてはならぬ。寧ろ其消極的方面を充實

自餘の行を勵みて、佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にも落ちて候はゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、何れの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。とあるが、即ち諸善萬行を修するとの出来ない原因である。諸善萬行を修してはならぬ、難行難修をしてはならぬと云ふが現今の眞宗の掟なれど、其源は抑々我等罪業深重の者がとても及ばぬのである。其及ばぬものを出来るように思ふて居るから、自力心が離れぬのである。それ故にこれを戒めらるゝ教義となつたのである。然れども、難行難修をしてならぬ、餘佛餘菩薩を拜んではならぬと云ふ掟よりも、我等が罪業深重にして餘佛餘菩薩の力でとてもたすからず、餘行餘善も及びがたき自己たることを自覺せねばならぬ、例へば諸の醫者や諸の藥で助からぬ時、自分の病氣の重きとを忘れて、醫者や藥を批難したならば不都合といはねばならぬ、蓮如上人が諸佛菩薩を輕賤せなといはれたも、此

せしめ満足せしむる、大積極の力あるとを忘れてはならぬ、即ち上記の破戒無戒愚痴無智何れの行も及び難き者が、たもち易く稱へやすき様に選擇攝取したまへる唯一の行が即ち念佛である。是が即ち專修念佛の大積極的方面である。選擇本願の親心である。唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと善き人の仰せである。所謂此行は諸の善法を攝し、諸の徳本を備ふ、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、かるが故に大行と名づく、如此く萬徳圓滿の大積極の力である。

○常に云ふ譬喩をくりかへせば、南無阿彌陀佛の六字は即ち是れ粥である。其消極的方面を云へば、粥は病人のために作られたるものである、堅いものも食へず、菓子や果物も食へず、所謂何れの行も及び難き者に食べさせんとの親心である。是れ如何なる者も食べられない病人に食べさせんとの親心にして、是によりて何れの行も及び難き地獄必定の我身たる事を自覺するのである。如此く、我等は粥を與へられたることに

よりて、一面には始めて我身の病人たること、即ち罪惡なるを自覺するのである。然しながら其粥はありとあらゆる滋養分を集め、萬徳圓滿の大積極の南無阿彌陀佛である。如何なる食物も食べられない大病人に對して、あらゆる滋養分を集めたる南無阿彌陀佛の粥である。故に一度此粥を頂けば、如何なる病人も満足し、如何なる缺乏も充實さるのである。是れが即ち一向專修の大積極である。

○我等が諸善萬行も出來ぬ、現世を祈ることも出來ず、所謂難行難修をすることも出來ず、何れの行も及び難き地獄必定の罪惡深重の我等が、不可稱不可說不可思議の大功德の滿ちたる南無阿彌陀佛の御廻向によりて全く救済さるのである。故に消極的方面よりいへば現世を祈る心を交ふることも出來ぬのである、然れども此如來の眞實を頂けば「心だに誠の道にかなひなば、いのらずとも神や守らん」とある如く、現生十種の益を始めとして、あらゆる現世の利益は期せず

して自然に至るのである。是れ即ち積極的方面である、平太郎が熊野に參詣する時、内懷虛假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を表せず、唯本師の誓約にまかして、一向專念の念佛を稱ふところは、消極である。されど其念佛が熊野權現の御本意にかなふ所以にして、彼れは善信が教へによりて、念佛するものなりとの聖人の靈告によりて、敬屈の禮をあらはし給ふと云ふところは積極である。是を神社問題標繩問題につきて云へば、我等罪深き者が身を清めて神社に參らふが、とても心を清めることは出來ぬ。又如何に標繩を張りて見ようが、罪業深重の我等はとも障りをのぞくことは出來ぬ。故に神社に參ることも出來ず、標繩を張りても何の益もないのである。是如此き形式を用ゆること能はざる所以である。然しながら、念佛無得の一道を戴けば、天神地祇も敬服し、魔界外道も障礙することなく、諸神諸佛菩薩が護持養育したまふ利益は自ら來るのである。例へば危篤の病人に對し

ては如何なる醫者も匙を投げ、如何なる藥も其效なき時、一大名醫あらはれて、本願醍醐の名藥を與へたまふ時は、決して他の諸の醫者は是を退けざるのみならず、如何なる醫者も此藥を推賞して是を用ふるのである。是即ち十方恒沙の諸佛如來、皆共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讃歎したまふ所以である。如來世に出興したまふ所以は、唯彌陀の本願海を説かんが爲

なりと云ひ、又三世の諸の如來の出世の正しき本意は、唯彌陀の不可思議願を説かんとなり、とあるが皆一向專修の積極的方面の實現と云はねばならぬ。故にたとひ標繩を張らずとも神社に詣せずとも、如來の眞實をだに頂かば、あらゆる天神地祇も喜び守り給ふのである。茲に於て、近時八釜敷問題も如此き信仰の立場より圓滿に解決す。

現代青年の煩悶に同情す

○現代青年の心理状態ほど複雑なるものはない、又複雑ならざるべからざる境遇に立つて居るのである、何んとなれば一方には律法主義を以て飽まで奮闘せねばならぬといふ様に餘儀なくせられて居る、一方には現代主義物質主義の風潮が滔々として漲りて居る、而して現代青年は此中流に棹して此激浪を切り抜けて、成功の彼岸に達せんと試みつゝあるのである。

○人間が最も苦しむのは意志が兩重に働いて、而も反對の方角に走らんとする時である、而して現代の思想界は正に混亂の有様である、故に甲の説く所と乙の唱ふる所とは全く正反對である、丙の主義と丁の主張とは正に矛盾である、而して此等の指導を同時に受けねばならぬ境遇に在るものである、甚しきに至りては同一の校内に於て、同一の誌上に於て、其反對の指導を

かに泥んや善人をやと、此條一旦其いはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけりとある、是である。

○同第十章にも抑彼の御在生の昔し、歩みを遼遠の洛陽にはげまし、信を一つにして心を當來の報土にかけし輩らは、同時に御意趣を承りしかども云々とある、同信眞實の信者が同時に御意趣を承りたのであるから、即ち上の所謂本願他力の意趣のことである、又歎異鈔のみならず、他の書にも此の如き意味の文字がある、たとへば御傳鈔に親鸞聖人が法然上人より法を聞かれることを描きて、眞宗紹隆の大祖聖人、特に宗の淵源を盡し、教の理教を極めて之を述べたまふに、たちどころに、他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しましたけりとある、此他力攝生の旨趣といふが決して軽い言葉ではない、上記の本願他力の意趣とあると同じく、他力信仰の要點である、眼目である、他力の他力たる根本的趣意である。

○其意趣なるものは善人なほもて往生をとぐ、泥んや

悪人をやは一語である、物質的救済とは生活の出来ぬ貧民を救ふことである、既に救済といふ已上は、貧しさもの程可愛いのである、貧しさものほど救はねばならぬのである、又難船の時救助船を出す場合を見よ、泳ぎつゝある人よりは泳げぬ人、力強き人よりは力弱きものを先づ救はねばならぬのである、此の如く救済といふことは、最も苦めるものを第一に救はねばならぬといふことである、是が救済の意趣である、本意である、救済の根本原理である。

○而して我等衆生中に於て最も悪しき私を、最も苦しめる私を、特に可愛ゆく不察に思召し下されて御見捨ないといふことが本願他力の意趣である、現代の青年は自分が悪いといふて悲觀し、自分は駄目じやといふて落膽するのである、然るに大悲の親様は悪い程可愛ゆく思召下され、駄目な程やる瀬なく思召下するのである、しかればいやでも應でも其御慈悲をいたしかねばならぬのである。

○自分は駄目じや、自分は悪いと悲觀失望しつゝある處へ、其駄目なる點、悪い點を決して悪くは思はぬぞ、見捨ないぞといふことである、否悪い點駄目な點を了解して、特に可愛想に思召し下さるといふのが本願他力の意趣である、悪い私に其悪い點を特に了解して見捨てぬといふ思召であつて見れば如何にも誠に蓋の相稱ふ、如く一分一厘隙のない御信心である。

○しかるに此點が特に了解しにくひのである、悪くても御見捨ない、駄目でも見捨てぬといふことなれば一應分かり安いのである、されど直ちにかく考へるのである、悪しくとも見捨てぬ、でも構はぬとは仰せ下されても、何れかと言へば善き方が可いのである、駄目でない方を御喜び下さるのである、故にたとひ見捨てぬと仰せられても善きに如くはなしと思ふのである、此に於て矢張結局悪しきもの、駄目なものは失望落膽せねばならぬのである。

○歎異鈔十六章に口には願力をたのみたてまつるといひて、心にはそこを悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよくくんものを、たすけたまはんすれどおもふほどに、願力をうたがひ、他力

をたのみまわらす心かけて、邊地の生をうけんこともともなげきおもひたまふべきことなりとあるが是である、親は悪い小供も見捨てぬども、どちらかといへば善い方が可愛いといふなれば、悪い小供は何共仕て見様がなののである、悪いほど可愛いと言ふて貰ふてこそ、悪い小供も初めて親心を頂くことが出来るのである、是が兩蓋相稱の味である。

○私は貧賤で致方ないと悲む所へ、其貧賤なる點が特に可愛いと言はれて見れば、實に飛立つばかりである、自身は不具者であることを特に悲觀してある所へ、特に其不具なる點を可愛想に思召して、飽迄憐愍下さる御慈悲をさいて見れば私のための親様である、天にも地にも私一人のためにあはれて下された唯一の親様である。此親心を頂きて見れば、如何な極惡深重の私も特に聖尊の重愛を蒙る次第である、此に於て禍轉して福となり、不幸轉して幸福となるのである、是が本願他力の意趣である、他力攝生の旨趣である、一分一厘隙のない御慈悲である、攝取不捨の御力にて飽まで見捨てたまはぬといふが是である、此に於て自分として自己の價値を認むるとが出来るのである、自分は極惡深重であるが、此自分のための重愛を頂きて見れば、初めて自分の人格を見認められたと言はねばならぬ、是れ現代の煩悶者に向て是非共深く知らしたい點である。

求道會館落慶式報告講演速記

挨拶

長尾 收 一

是より式を行います。本日當會館の落慶式を行いますに就きましては、閣下、諸君、此大多數今日御來臨下さいましたのは誠に光榮の至に存じます。厚く御禮を申し上げます次第であります。就きましては皆さんに式の順序書は差上げてありますが、尙御參考までに一寸申上げて置きます。最初會主が三歸を唱へられますから此間は皆さん御起立を願ひまして、それが済みます

經過報告

私は發起人の一人としまして、今日までの經過の

萩野 伸三郎

告を致します。既に先刻御手許に差上げました求道第

三號の末尾に於きまして、求道會館建築經過報告並に會館構造の概説といふものが記載してございますので、大要は之を御覽を願ひますれば御分りにならうと思ひます。且つ時間もありませんから、成るだけ簡略に申上げて置きます。

それで御承知の通り近角師は、三十五年の三月に外國から歸つて見えまして、それから前來探り來つた所の方針を一變して、力めて信仰の鼓吹と云ふことに傾かれて、同年六月一日から此求道學舎といふものを始められたのでございます。段々此信仰の方面を鼓吹せらるゝに就きまして、三十六年六月に至つて求道會館の設立といふことを、始めて世に發表せられたのでございます。然るに御承知の通り近角師は、唯信仰のことばかりを彼方此方と説いて居られて、寄附金の募集のこととを一向言はれぬのであります。それで何時まで経つても寄附金は集りませぬので、空中樓閣と云ひますか夢に書いて居るばかりで、何時迄経つても實際のものが出来て参りませぬ。それで四十四年の夏に第一回夏期求道會といふものを開かれた時に、有志者が集りまして、いろ／＼近角師と相談を致したので、其時

に發起人の相談をして、愈々會館の始末を付けなければならぬといふことに相談が纏まりました。其處で當時集まりました者の中から、先づ小河滋次郎氏、柏原文太郎氏、澤柳政太郎氏、有田廣氏、長尾收一氏、大草憲實氏、西澤善七氏、それと不肖萩野伸三郎とが發起人總代となりまして、更に全國に趣意書を發表致したのであります。其中で此西澤善七氏には、會計の方を御擔當を願ひまして今日になりました。斯の如く四十四年以來計畫を一變して居りましたのであります。尙其寄附金の募集は遅々として捗りませぬ。御承知の通り發起人は西澤善七氏を除いては、金に縁故が薄いのであります。第一の近角師は寄附金を貰ひに行きましても信仰のことを説いて、寄附金のことは忘れて歸つて來るといふ始末で、私共もそれと似たやうな譯で、一向届きませぬが、それにも拘らず今日斯の如き結果を得ましたのは、全く是は佛天の加護と、此寄附を戴きます皆様の淨き御喜捨とに依つたのでございます。尙ほ之に就きまして會計報告は別に申上げますが、斯の如く貳萬有餘の金が何等募集費用ひませずに、又何等運動員をも用ひませずに、多額の喜捨を頂いたといふ

ことは、是は兎も角我國の斯ういふ寄附事業に於きまして、寔に珍らしい、寧ろ奇蹟ぢやなからうかと思ひまして、深く佛祖に感謝致すと同時に、今日御集りの方々並に全國に亘つて喜捨を戴いた方々に對して、私共感謝の念に堪へないのでございます。

さう致しまして此會館の設計に就きましては、恰度私の舊來の友人でありまして、又近角師が信仰上時々御引合に出さるゝ所の御人であります西川理學士の親友であります所の、京都高等工藝學校の敎授の武田工學博士に、私共から近角師の紹介をしまして、此會館の性質と近角師の信仰の鼓吹の仕方等を委細に話したのであります。斯の如き性質の下に出来るのであるから、どうか其積りて設計をして貰ひたいといふ依頼をした所が、御承知の通り三十六年以後度々模様を變へますと前後に三回の設計を致して居るのであります。所が武田氏は最後に又亞米利加の方に博覽會のことで洋行しますに就て、出立の間際になつて、今日皆様が御覽下さるやうな會館の最後の設計をして貰つたので、就きまして設計の大方針は力めて經費を減少する、さ

うして又力めて堅牢で力めて質實莊嚴であつて、而も其間に多少の典雅優美の點をも加味して貰ひたいといふ様な六ヶしい注意を矢鯉に述べて、扱申しますには、若し此會館が耶蘇敎の會堂のやうに見えても困るが、去りとして從來の御寺の様な風に見えても困る、又普通の煉瓦造りでも困るといふ様な、種々なる點を持ちまして、武田博士に注文を致したのでありますが、武田氏は能く此精神を吞込んで呉れまして、さうして今日御覽下さるやうな會館を得たのであります。御覽を戴いて大抵御想像は戴くだらうと思ひますが、私共最眞實な目も知りませぬが、今日出来上つた此會館を見ますれば、佛敎の會館の第一番の試みとして、左程不釣合なものでも無からうと思ひますので、殊に此佛像を安置します所に於ては、武田君も一段の考慮を煩はしまして、斯ういふ様な設計を致したのでございます。此點は會館のあらん限り、設計者である所の武田氏に、吾々一同は絶えず感謝を拂ひたいと存じて居ります。尙ほ之に就きまして又武田君が信用して居ります所の戸田組が、是又武田君の設計の意味合を能く呑込み、尙此近角師の事業を能く了解を致しまして、營利的事業でなく

非常な義俠心と又之に従ふ所の非常な勤勉とを以て、此會館の建築に當つて呉れられ、従つて戸田組に使はるゝ所の建築の方の役員の方々も、亦非常なる勉強を以て今日まで働いて戴いた、それから親しく現場監督の任に當つて下された方があつて、實施の上に遺漏なき注意を以て非常なるお骨折りをして下されたのであります。それが爲に存外早く此會館の落成を見る事が出来ましたので、恰度曠古の御大典であります所の即位大典の大典を濟されました今日に於きまして、此會館の式を舉げることを得ましたものは、唯今も申し上げました如く佛祖の加護は勿論であります、大方諸

君の御同情と、又既に申したやうに、設計並に建築擔當者の御盡力に深く感謝を致す次第であります。終りに臨みまして發起人でありました大草惠實氏は、御存じの通り物故しまして、今日此席に見ることが出来ませぬのは、吾々深く遺憾とする所でありますけれども、必ず西方淨土より今日の此盛なる開館式を見て御出て下さることと思ふて、竊に慰めて居る次第であります。尙此後に會計のことは、會計を擔當して多年御苦心して下さいました西澤氏より御報告になります。左様御承知を願ひます。

會計報告

會計の御報告を致しますに就きましては、詳細に申上げたくも思ひますが、詳細に申上げますと徒らに時間を要します。今日差上げました求道末尾の方に、青い紙がございまして、之に概算が出て居りますから

どうぞそれを御覽下さいますことに願ひます。一寸申上げますと寄附金の既に受領になりましたのが壹萬六千五百圓、其他利子等を合せまして一萬八千六百圓になつて居ります。出の方が貳萬五千百幾圓、其中で實際

此建築に要しました方は、追加豫算共に合せて壹萬五千圓でございます。殆ど壹萬圓ばかりは其他の支出になります。それは此會堂のあります前にございました本造の建家を、卅六年に買取りまして地上權を得ましたこと、續きまして近くは周圍の建物等の費用がございましてのと其他でございますが、實際豫算ない費用のみで斯様になりましたのであります。唯今の庶務の御報告によつて凡そは御諒承下されたこと、存じますが、總て元費は少しも使ひませぬで、儉約を主臺として出来上つたのでございます。諸君の多大の御同情に依りまして、斯の如く落慶式を見ましたのは私共非常に喜びますが、唯今日不足の金額を御報告するのは寔に遺憾と存じます。此表には六千五百七十一圓不足になつて居りまするが、既に此印刷をしました後に貳千圓程收入になつて居りますから、今日の所で不足は約を五千圓程でございます。今日此開館を致しますに當つて不足なく、奇麗にして御報告致したい考てございましてけれども、一面には先刻庶務の御報告申上げたやうに、強ひて寄附を御勧誘申上げるやうなことをしないで、隨意に御願ひしてありました。又近角先生

の御人格としまして、法は能く御説きになりますけれども、寄附といふことには餘り重きを御置きにならない、それが又私の非常に尊ぶ所でありますが、それも原因でありますけれども、第一は私が會計監督と云ふ重き任を托されながら、此不足を報道するのは諸君に對して洵に相濟みませぬ。是は私の信仰の徹底致さぬ所と諸君の前に懺悔致します。又日々の雜務は實際多いのでございまして、それ故に御世話人の御方へ寔に相濟まぬ。雜務に追はれまするが、其間には人に會ふこともございしますので、いろ／＼に自分で考へまして此人は金持であるけれども信仰の無い人だ、信仰の無い人に斯ういふことを云うてはならぬ、此人は慳貪邪見な人であるからいけなからうとか、此人は慳貪邪見な人であるからいけなからうとか、いろ／＼自分に斟酌をして餘り勧誘を致しませぬ。多少致しても一向効果も舉がりませぬでしたが、矢張幾分か近角先生の御氣象を見越して居りますから、自分としても無理に勧誘したくないと云ふ考があり、其考から盡方が足りなかつたといふやうなことになつて、寔に相濟みませぬでしたが、どうか諸君が私の不敏な所を御助け下さいまし

て、尙不足な所もございしますから、決して御無理には御願ひ致しませぬが、御力の餘り幾分でも信心御同情のある所を、多少は決して申しませぬから、御援助を

祝 辭

本日開館の式に行遭ひましたのは、私に取つて芽出度いこと、存じまして、此席を汚すに至つた次第であります。素より斯かる結構な會館が出来ますといふとは、佛の御蔭と當局者の御盡力に相違無いでせうが、近角師の御徳が集つて斯かる立派な會堂が出来たと申しても決して過言ではない、詰り師の御徳の結晶が此會館を成すに至つた、斯う申したいと思ふ。先頃近角師が書面で私の方へ三十日に開館式を行ふから、是非出て祝辭を述べよといふとを御申越しになりましたから、直ぐに私は返事を認めまして、近角師は地方へ参りますと生佛と云はれて居る、其生佛が御建てになつた會堂へ——私如きは世間では外道と申して居る——

願ひます。會計の報告は末尾の文を御覽下さいまして御了承を願ひます。

井 上 圓 了 氏

——外道の私が出て祝辭を述べるといふと、寔に立派に出来た御堂の光を汚す譯になるから、是は是非御斷りをしたいと申した所が、決して遠慮には及ばぬ、辭退には及ばぬから是非出よといふ再三の御案内がありまして今日出て参つた次第でございます。此近角師が佛であると思ふとは、私が特に一例を舉げて申して置かうと思ふ。先年私が石見に参りました時に——石見の地名は忘れましたが、落田と益田の恰度中間に當る郡は美濃郡かと存じます。此處へ参りました所が、私より二ヶ月程以前に近角さんが其處へ巡回して來られたさうで、私は恰度其後へ行きました。會場は眞宗の寺であつて、其處へ近角師が遠方から夕刻に着かれたさ

うてす。其晩は餘程御疲れになつた爲めに、夜の説教は至つて早く至つて短く済んでしまつたさうです。それからもう疲れて居るから寝ると云つて直ぐに御寝みになつたさうです。さうしますと此場所が海岸であつて、其處から海上一里とか一里半とか離れた所に一つの島がありまして、其島は非常に眞宗の繁昌な島であるが、其島で此度東京から生佛が御出になつたさうだから、是非其生佛の御説教を拜聴しなければならぬと云ふので、村中數十名の善男善女が態々船を拵へて、夜分近角師の行かれた村へ出て参つたさうです。さうするともう早や説教は済んでしまつたと云ふので、それは如何にも残念だ、併し説教は聴くことが出来ないにしても、切めてお姿でも、拜んで行きたいと云ふから、最早時刻が遅れて疾うに御寝みになつたと云ふと、其人々は如何にも残念と思つたと見えて、後へ参りまして庭先から近角さんの寢て御出でになる所へ押込んで行つて、或は手を撫て或は足を擦り、さうしてもう是れて澤山だ、御説教は聴かないでも生佛のお足をそれ／＼擦つたから、もう是で宜しいと云ふて歸つたと云ふ御話を聴いたので、それから東京へ歸つて間もな

く此ことを事實であるかどうかと思つて、近角師に聴いた所が、近角師は大體に於ては間違はない、併し少し話に懸直があるやうだと云はれた。是れは近角師の認印を取つた話でありますから、世間で云ふ話とは違ふと思つて頂きたい。さういふ生佛を以て迎へられ、生佛を以て待遇されて居るお方であります。之に反して私は外道である。何故外道であるかと云ふと、先年は北國へ行つた。彼處も眞宗繁昌の所でありましたが、其處へ立寄つて演説をせよと云ふとて、参つて見ると其土地に大きな寺がある。其寺が會場であるが、其寺で井上圓了など、云ふ人はあれは外道である、外道に寺へ來て演説をして貰ふことはならぬと云ふので、遂に寺が會場になることが出来なかつたので困つたとがある。此一例を以て見ると、私は外道を以て迎へられ、近角師は生佛を以て迎へられる人である。其生佛の御建てになつた會堂へ、私如き外道が上つて、而も會館の落成式の演説をするなど、云つたら、確に會堂の尊嚴、又開館式の盛儀を汚すこと、存じて御断をいたしました。所が近角師は流石生佛だけあつて寛大な御方で、一切衆生を濟度すると云ふ位なお方ですから、貴様の

様な外道でも差支ないといふ事でありました。是は外道も來れと云ふ有難い思召で御招き下されたものと思つて、實は喜んで御請けをして参つた次第であります。

尙進んで私が外道を以て目せらるゝ譯を申しませうが、私の佛教に就ての考は、既に御承知の御方もありませうが、活佛教主義と云ふのであります。前年雜誌には新佛教徒とありましたが、私は其新佛教とは少し違ひます。新佛教の方では是までの佛教は總て舊佛教である、是から新佛教を起さうと云ふ主義であつたらしい。私は是までの佛教は死佛教で、是から起す佛教が本當の活きた佛教だ、斯う云ふ主義で活佛教と云ふことを唱へて居る。其活佛教の主義としてはどう云ふことを説くかと云ふと、先づ之を眞宗の方で申しますと、是までの眞宗の説教と云ふものは大抵眞諦門に傾いて居つた。然るに私は俗諦門に重きを置く。俗諦門に重きを置くと云ふ譯は、眞宗の教は眞俗二諦である、二體双依とも云ふ、或は双門ともいふからして、詰り眞諦門俗諦門が並行して進まなければ可かぬ。所が是までの教える所は眞諦門一方に傾いて居る、殆ど俗諦門は無いと云つて宜い。俗諦門の方は廻らずして、眞諦

門の方のみ動いて居るのでありますから、之を車に喩へて云ふと、一方の輪が動かずに他の輪のみ動いたら、其輪は軌道を外れるか顛覆するの外はない。さういふ場合には寧ろ俗諦門に一層力を入れなければならぬと云ふ私の主義である。今日は俗諦門に一層重きを置いて説かなければ、眞宗の車は顛覆するより外無からうと云ふので、私の活佛教主義は俗諦門に重きを置いて説くと云ふことになつて居ります。それから眞諦門に就ては、決して私は眞宗の安心上に立入つては話を致さぬ。此安心上のとは専門の學者に任して、學者の説に従ふこと、します。併し其眞諦門の應用に於ては、私は是までの佛教家の説方と少しく違つて居ります。其應用とは何であるか。私の見る所に依りますと、どうも日本の佛教は厭世に向いて可かぬと思ふのであります。何やらどうも此世の中が悲しくて堪らぬと云ふやうな心細い佛教になつて居る。念佛の方から申しますと、世間の眞宗の信者の唱へる所の念佛は何となく悲みを帯びて居る。之を私は悲觀的念佛悲觀的佛教と云ふ。眞宗の念佛の本意は決して私は悲みを帯ぶる悲觀的の念佛であるべきものでないと思ふ。喜びの念佛、樂み

の念佛、喜び勇んで唱へられる所の念佛にしたいと云ふことを考へて居る。此點に於て私のは少し世間の人と説方が違ふであらうと思ひます。今一つは私は佛教の活動を説く、活動主義——活佛教は即ち活動主義である。譬へば念佛を唱へるにしても活動的念佛を唱へる。地方などへ参りますと眞宗信者の人がどういふと言ふかといふと、もう私も年が寄りましたから世の中のことを棄てて、御念佛だけ唱へて居らうと云ふ。私はそれがいかぬといふのである。斯ういふやうな念佛だけ唱へて居れば、其他のことは何もせんでも宜いといふ佛教ではいけない。念佛を唱へながら活動せよと云ふことを私は説く。念佛を唱へながら鐵錘を持つて働け、念佛を唱へながら武器を持つて闘ふが宜いと云ふのが、私の活佛教の主義であります。此等の點に於ては幾らか世間で説く所とは違ふかも知れませぬ。併しながら私は安心上のことに立入つては一言も申さぬ、これは専門の方に御任せ致します。但し之を應用する點に於て、是までの仕方とは違はなければならぬと云ふのが、私の活佛教の主義であります。

それから又活佛教としては、教育と宗教の親密な關

係にあると云ふことを頻りに説いて居ります。地方へ参りましても、私は教育と宗教の關係に就て御話するといふとに殆ど極まつて居る位である。舊來の佛教としては教育と佛教とは全然離れて居りまして、教育と佛教とは他人同様なる間柄の如くに見做されて居る。それを私は始終教育と宗教の關係は極めて親密なるべき筈のもので、決して他人の間柄ぢやない、親類か兄弟の間柄ぢやと云ふことを説いて居る。此點は今日落慶式に於て述べる必要もありませぬが、又述べれば大變長くなり申すから申させぬが、但しそれに就て唯一言申して置させう。教育と宗教の一致する點は修身道德で、言ひ換へれば倫理の點にある。如何なる教育と雖も倫理を説かない教育はない、同時に如何なる宗教と雖も倫理に關係せぬ宗教はない。此點は正しく教育と宗教の一致する點と見て宜しい。併しながら其倫理の見方が教育の見方と宗教の見方と違ふ。教育の方で倫理を説く時には、吾々人間は此心を靜めて見ると、此處に何となく奥床しい所奥深い所何となく崇高い所から暗々裡に尊い聲が聞える、之を先天の命令とか先天の聲となす、其處までは説きます。吾々の眞心の裡

に誠に尊い聲が聞える、何となく聞えて來るといふことは説くけれども、其本體を認めることが出來ない。

先天の聲を聞く外に、先天の光を視ることが出來ない、先天の姿に接することが出來ない。其點に於て私は教育の教へ方は人間の眞心を盲目にするものである。聲が聞えても外が見えない、是は間違であると云ふのである。教育が吾々の良心に修養を與へるのは、寔に結構であるけれども、其修養の與へ方は人を盲目にして居るもので、詰り教育は吾々の眞心の耳の穴をほぐつて呉れるまで、ある、眼のやには取つて呉れない。てありましますから教育で修養を受けたばかりでは、詰り片輪の眞心が出來るのであります。それを今一步進んで、今度は宗教の方面から眼を開いて貰はなければならぬ宗教は當しく先天の光を見せるべきものである。此處は確に私は教育と宗教の相違の一點だらうと申して置きます。兎に角私の説く所は成るべく教育と宗教とを親密にさせ、今日の世道人心を維持する上に於て、此兩方面から進めなければならぬ。一方に於て教育が人の眞心の耳の穴を掘ちつて呉れたならば、之に加へて宗教は人の眞心の眼を開いてやるやうにしなければなら

ぬ。

又會堂などにしても、是までの我國の佛教の寺は、あれは儀式を行ふに適したものであつて、演説をしたり教會を開くといふ上には至つて迂遠な建方であふ。どうしても此寺の建築も取變へなければならぬといふことも申して置く。是は私の平素説く所の趣意であります。斯く御話したならば或は世間から外道と云はれるかも知れぬけれども、近角師の趣意と私の説く趣意とはさう大變な相違は無いと思ふ。或點は違つて居りませうけれども、さう違つて居る譯ぢやない、既に斯う云ふ會堂の出來たのも、私の理想と誠に能く一致して居る。して見ると私の活佛教と近角師の仕事とは、さう違ひはない、先づ親類位に見たら宜しい、決して他人の間柄ぢやない。其處で私が今日此落慶式に來るとを御許しになつたのも、畢竟親類と云ふお考からであらうと思ふ、私の方でも假令世間では一方を外道と見、一方は生佛と見做されて居ても、心の裡では幾らか親類と云ふとを自覺して居るので、喜んで出た譯であります。却説此方へ参つて見ますと、却々立派な佛教會堂で、確に模範たるべきものと云ふことを認めました。是ぞ

て私は建築は何十回となくやりました。それで大抵建築と豫算とは自分が経験上分つて居りますが、始め報告を見せられて其報告を讀んで、大抵此位な出來のものであらうと云ふことを豫想して居つた。然るに今同此方へ着いて見ると、豫想所ぢや無い、斯かる立派な會堂が出來て居る、どうしても私の豫想より倍の立派な會堂になつて居るのであります。是といふものは段々考へると云ふと、設計して下さつた御方も建築を引受けられたお方も、何れも義侠的に骨を折り、總ての

祝 辭

高 楠 順 次 郎 氏

私も一言御喜び申して置きます。唯今井上さんは自ら外道と申された。若し井上さんが外道であらうならば、私は外道外の外道とても申さなければならぬ譯で。是は井上さんが自ら外道と仰せになりましたのは、多分御自身に外道哲學を御書きになりましたから、それで自ら甘んじて仰せになつたものと思ひますが、私

經費を節減して、斯う云ふ立派な會堂が出來上つたのであるといふことを承つた。其處で尙ほ一層近角師の徳の尊いことを感じました。詰りそれ程に誰も彼も義侠的にやつて呉れると云ふのは、近角師の徳が其處まで及んだのであらうと思つて、一層感じました次第でございます。斯う云ふ落慶式の時に、餘り長たらしい演説は却つて御迷惑なことにならうと存じます。然るに私は活佛敎など、餘計な話をして、相濟まぬことでございましたが、之を以て御免を蒙ります。

は外道外の外道で——さういふ資格も無い位の者であります。併し此外道までも來つて此會堂の落慶式を讃嘆するといふことは、又一つの求道學舎の何と申しますか——飾りとても云つて宜いことと思ひます。所で外道の中にもなか／＼面白いことを云ふものがある。殊に印度の外道は非常に面白い。佛敎が印度に生

れて斯の如く深いものであると同じやうに、印度の外道は餘程深い。又西洋の外道に較べて見ても、印度の外道は面白いことを云うて居ることが多い。印度の外道が申したことに、一つ私が非常に感じて居ることがあります。それはどういふことであるかといふと、人間も社會も國家も時代も、或は學問でも宗教でも、何でも四つの主義で支配されて居る。此四つの主義が互に混融し融和し和合して、社會の活動を生じて居るものである、斯う云ふことを云ふて居る。四つの主義とはどういふことであるかといふと、甚だ平凡なことで、吾々皆知つて居る、一を學問主義と云ひ、一を實行主義と云ひ、一を觀念主義と云ひ、一を信仰主義と云ふ。此四つが何れの方面に於ても社會の上に行はれて居る。人間で申したら個人の上にも、或は個人が生活する上にも總ての所に行はれて居る、斯ういふことを言ひます。段々考へて見ますと珍らしいことぢや無い、其通りになつて居る。吾々が育つ初めは學問をして來て居る、即ち學問時代がある。所が段々進んで行くとそれを實際に行はうと云ふ實行時代が来る。段々實行して見ると、或は失敗し或は成功する、其間には觀念を生ずる、

自ら考へる、是が自覺を生ずる時代である。最後には何をやつても吾々の考と云ふものは餘程詰らないものであると云ふことが解つて來ると、信仰時代に這入る是が終りであります。個人で云ふとさうであります、若しそれが本當ならば、社會も個人の集つたもの、大宇宙は小宇宙の集りてありますから、社會の進歩を藉へて見ると、或時期或時期によつて皆此時代があります。之を宗教の上に見てもさうである。佛敎でも一番初めは釋迦の敎の通りを學ぶと云ふ學問時代であつた。其次には幾ら學問しても其の通りやつて居つたのではない、吾々は實際に戒律を行ふて行かなければならぬと云ふ時代になる、是が實行時代である。其次には幾ら戒律をやつても駄目であると云ふことになる、是處で觀念主義と云ふ時代に這入る。禪宗と云ふやうなものが盛んになつて、觀念が大切であると云ふ時代がそれであつた。最後には幾ら觀念して見てもいかぬから、信仰主義と云ふ信仰時代が出て來る。佛敎の上で申すと斯う云ふのであります、之を日本に合して見てもさうであります。日本へ佛敎が這入つて來てから、奈良朝の佛敎は學問時代である。平安朝の佛敎は段々實行

の方面に向いて來て居る、實行時代である。所が是が其次の鎌倉時代になりますと、禪と云ふやうな非常に觀念自覺を重んずる方の佛教になる。最後には日蓮宗、淨土宗、眞宗と云ふやうな念佛宗——信仰主義の教が出來た。日本の佛教はそれが發達の止まりである。是から後にはもう新しい宗旨は出來ない。此四つの主義が段々行はれて來て居るのであります。

所がもう一つ進んで維新以來の狀況を考へて見ると、廣く知識を世界に求めるといふ主義が維新此方行はれて、是が日本の學問時代である。所が段々進むと學問ばかり幾らしても可かぬ、之を實行しなければ駄目だといふので實行の時代が來た。實業を盛にせよ、實業を興せと云ふ聲が高くなつて、其方面の發達に力を入れた、是が日本の實行時代である。此實業時代にはどんな悪いとをしても金さへあれば宜い、實業界で勢力があれば社會の優勝者であつて、其外の者は皆劣敗者であるかの如くに見て居つた。所が其實業者も斯んなことではいかぬ、實業上にも道德が無ければいかぬといふので自覺の方に向いて來る。さうすると種々の講釋を聽いて見たり研究したりする。所が近頃に至ると

實業家にも信仰と云ふ土臺が無くちや何にもならぬと云ふので、信仰の土臺が必要であるといふことが頭の中に起つて來て、日本橋の眞中でも始終法話なり説教なりを聽いて居るといふ方面もあるやうになつた。是は日本の維新以來の時代が稍最後まで近付いたのであります。それで私がいろ／＼に考へて見るのに、明治時代がそれで一區劃になつて居る。其明治の一時代と云ふものは學問時代から始まつて、稍や信仰時代まで漕付けたが、是は一つの波である。四つの小波が打つて居りますけれども、まだ全體の無數の運動から考へて見れば、此明治時代と云ふものはまだ／＼いかぬ。明治時代の進歩は非常に物質的に偏して居る。全體から云へば全體のうちの或る一時期で、是から先ずつと通じたものゝ學問時代かも知れぬ。其處で此大正時代の進歩はどうならなければならぬかといふと、一層精神的の方面に向つて行かなければならぬものと覺悟を定めなくちやならぬ。それで私は日本に維新が二つあると思ふ。王政復古の時の維新は明治の維新で、今日は大正の維新でなくちやならぬ。所が此二つの維新はどちらも副産物がある。明治維新の副産物は宗教に取つ

ては大打撃である。廢佛棄釋が無くつても明治維新は確に出來た。所が斯う云ふ副産物が出たので、佛教者は涙を流して、今日にも佛教の運命は日と共に没して居るやうに感じて居つた。寺を壞す、僧侶は自分の教を説教することが出來ないと云ふやうな工合、此時のことは能く御承知であらうから申しますまいが、明治維新の副産物は佛教に非常な打撃であつた。大正維新になりまして茲に御大典の盛儀が行はれた。是は誠に内外上下共に慶賀すべきことであります。斯う云ふ有難い時代に吾々が遭遇したのは、實に千載一遇と申すべきことで、迎も再び吾々の遇ひ得べきものでは無いと思ふのであるが、此第二の大正維新にも副産物がある。而して此副産物は佛教に取つて更に非常なる副産物である。それは如何なるものと云へば、是も亦悲むべき副産物である、即ち佛教徒は全く度外視されて居ることである。無限の廢佛棄釋、大正の御大典には佛教者は殆ど無關係沒交渉と云つて差支無いと私は思ふ。無論此御大典の結果として現はれましたる事柄に就ては、吾々が一言其間に言葉を挟むべきことではない。總てのことに對し決して之に彼是言ふべきではな

い。世間には能くある、現に不平を言つて居る人は各方面にあるやうでありますけれども、私は斯う云ふ事柄に就て不平を挟むべきものではないと思ふ。中には此御大典の式に——十三宗の宗旨があつて、三十六派であつたか大變な派がある。それに僅に一人の代表者を御大典に出されて、それで黙つて受けて居る佛教者が不都合ぢやと云ふ人もある。私はさうは思はぬ、有難いことである、出席するやうにと命ぜられて之を受けないのは恐懼の至である、吾々は受けないと云ふやうなことがあつて宜いものではない。佛教者の性質として、又帝室に對する今日までの佛教者の態度として、決してさう云ふことはいけない。さういふやうなことを云うて居る人もありますけれども、私はさうは思はぬ。佛教者、宗教が是まで度外視されたのでは無いと云ふことも亦記憶しなくちやならぬ。其處で又いろ／＼なことを云ふ人もある。耶蘇教の學校を教へたのは教育の功勞として表彰されて居るが、佛教の學校を教へたのは教育の功勞として表彰せられないものであるか。或は僧侶にして帝國大學に三十餘年間教育に従事して居つた人は、教育者として表彰すべき價值は

無いであらうか。佛教主義の私立大學の經營者で、而も宮中からして恩賜金のあつたやうな學校は、是も教育者として表彰さるべき價值は無いのであらうかといふ人もある。斯う云ふことを一々擧げて、それを指して吾々が兎や角云ふべきことぢやない。御大典に就て吾々は一言も挾むことは出来ぬと云ふことは、私が上來申上げた通りであります。併しながら今日の當局が、斯う云ふ方面を忘れたと云ふことは事實である。佛教と百數萬の佛教者の今まで爲し來つた努力は、會て當局の注意を惹かなかつたと云ふことは事實である。是はどういふものであるか、此點を考へて見ると、此處で佛教者は非常に反省しなくちやならぬ。今までの佛教者のやり方と云ふものは、得て先に井上さんの仰せになりましたやうになり、或は現世的でない、社會的でない、進歩的でない、實際的でない、悉く其反對の方面に向つて居る。詰り全體を一言にして云ふて見たら、退歩的であつて、明治の進歩には一向没交渉であるといふことになる。又實際を見るとさういふやうな形ではないかと思はれる。各宗各派の内情、又最近五六年間に起つた事柄で以て考へて見ましても、佛教は益

々退歩に向つて居るぢや無いかと云ふ様に思はれる。色々の點から考へて見ますといふと、此大正の維新の益々精神的に向はなければならぬ——明治の一通りの進歩は信仰時代まで漕着けたと云ふ此區劃の時に當つて、此信仰時代を支配するのは佛教者では無くて、或は耶蘇教者ぢやないか。耶蘇教者ぢやなくつて、もう一層近頃非常に盛んになつた所の神道信仰ではなからうか、是は私が非常に惧れる所であります。折角是までは日本が信仰時代に向いて來た、信仰時代に入つて第二の維新は信仰的發展であると云ふことが眼の前にあるのである。其信仰と佛教は没交渉であるのぢやないか。日本の信仰的の進歩、精神的の進歩に於ては、佛教の貢獻した所は非常に少いのぢやないかと云ふやうな感じがするのであります。さうではない、日本は商工士農を通じて皆純粹にまだ佛教的である、決して過去の夢ぢやない、將來に向つて佛教が信仰の中心であつて將來を支配する、將來の精神に光明を仰ぐべきものは佛教であるといふとを總ての方面に向つて知らしめ、殊に當局の人をも此點に於て感ぜしむる様な仕事を、私はお互に佛教者として一つして見たいもの

と思ふ。

さういふ點からして考へて見ますといふと、從來の寺といふものは、或は儀式を行ふのも寺でありましたが、兎に角寺は出家した人が自分に修行する所である、出家本位の寺である。所が眞宗、念佛宗の寺はさうぢやない、信徒中心の寺である。信徒が法を聴く所に出來て居る所が其信徒中心の寺であるのに、是は皆さん御同感でありませうが、私共地方へ行つて演説でもすると、若し市會議事堂でやるとか、或は他の會堂でやるとか、學校でやるとか郡役所でやるとかすれば、宜しい人が出て來る。然るに若し寺で演説をやるといふとさういふ宜しい人が出て來ない、是は甚だ解らぬことである。若し演説が宜いならば、會場は何處であらうとも出て來なければならぬ。所が同じ演説でも一方では來るのを、一方では來さしめぬやうにするのはどういふ譯であるかと云へば、寺と云ふものの習慣である。寺といふのへ信仰を聴さに行く習慣といふものが學問主義の人にはない、實行主義の人にもない、觀念主義の人にもない。唯信仰が死んだものとして有つて居るやうな風の爺さん婆さんと云ひませうか、さう云ふ方面

にのみ残つて居るのぢやないか。それで私は此會館の建つといふことの知らせを受けた時には私は甚だ不賛成であつた。日本には是程澤山寺がある。既に東京で以て寺を建てるといふのも私は不賛成である。寺が澤山あるから之を利用すれば、市會議事堂でなくとも寺で何でもやれる。東京には何千と人を入れる所が無いといふけれど、何千でも入り得る寺は幾らもある。それに會堂を建てやうと云ふのは不都合な話である。又信仰を説く所は寺と極まつて居る。それに別に會堂を建てることは入らぬことだ、斯う思ひました。それは是が爲に或は近角師の徳を傷けやしないかといふ考がありましたので、不賛成は表しはしないが、さう考へて居つたのである。所が段々と前後の事情やら社會の進む工合を考へて見るとさうでない。最早寺の佛教は過ぎ去つて居る。今日此私の今云ふ四つの主義を有つて居る人、どの主義の時代にある人でも何時でも快く足を向けて聴けるやうな會堂といふものは、もう既に寺には先づ無い。さうして見るとどうしても一つ新しい會堂が必要である。愈よ必要であると私が頭の中で感じて考へて見ると、日本に斯ういふ必要な會堂が幾

つあるだらうか。幾つあるかぢやない一つも無い。偶々廣島の崇徳教會の如き金のある團體の建てた會堂はある。けれどもそれは團體が建てた寺である。個人の説かれる信仰の力で出来た會堂——個人の經營で成つて、而も衆多の人が之を利用して、茲で快く道を求めることが出来るといふやな會堂といふものは、日本國中にあるかも知らぬが未だ之を知るとを得ませぬ。斯うするといふと、先づ此大學の方面——恰度大學の眼の前に於て求道會館が出来ましたので、實に此邊の人は幸福である。日本國中に宗教——佛教は澤山あるけれども、斯ういふものは外にない、當會堂が模範的に此處に出来たのである。模範的といふけれども、外に無いのであるから唯一無二の會堂が此處に出来たので、是は非常に喜ばなければならぬ。又是がタツタ一つの會堂であるかと思ふと、佛教全體を眺めて——從來佛教が日本に雄飛して居つた勢力から見ると、まだ非常に前途遼遠の考もするのである。望むべくんば斯ういふ會堂が東京到る所に、どの方面へ行つてもどんな種類の人が來ても——今申しました四つの主義の中のどの種類の人が來ても、最後の信仰主義といふ

ものまで漕着けて行かれる、其順序を踏んで其處まで持つて來て貰はれる會堂といふものが、東京のみならず日本國中到る所に在るやうにならなくては、本當の明治の時代が過去つて、此大正時代に入つた第二維新の精神界の全般を支配しやうと云ふことは出来ないのであります。私は此大使命と大任務を有つて生れた所の此求道會館の前途を、さういふ方面に向つて望むと共に、一つは寂寞の感を以て賀したいと思ふのであります。殊に參つて見ますといふと、此會堂は全部上から下まで「ケレオソート」が塗つてある。「ケレオソート」といふものは餘程臭ひのするものかといふことを考へましたけれども、匂ひも何にもない大變心持の宜いものになつて居る。御承知の通り「ケレオソート」は非常な防腐劑である。どうか大正の精神界の腐敗を、どうか此「ケレオソート」の力に依りて、木材の腐敗を防がれる如くに近角師の努力に依つて防いで頂きたい。大正の新時代は今の四つの主義を此第二維新以後もう一遍經過する。さうして段々細かに經過する、信仰主義も學問主義も實業主義も觀念主義も皆進んで來る。其處でどうか佛教徒は日本國中相率ゐて政府も民間も——

——幾ら愚鈍な當局者が出ても、幾ら不注意な當局者が出ても、佛教の活動を無視することの出来ないやうに一つお互ひに進んで行きたいものと思ふのである。此

祝 辭

南 條 文 雄 師

私は恰度十四年前、此近角さんが求道學舎を開かれた時代より時々出まして、初めの間は御話を致したことがあります。今日此様に會堂が立派に出来上つたに就て、其當時のことを思ひ出します。或年此求道學舎の報恩講に參つて、私に法話をせよといふことてありました。常に此求道學舎へ御出でになつて近角さんの御話を聴いて御出での方は、もう唯今では私より詳しく御承知でありませうけれども、私は今日まで命を保つて此立派に出来上りました會館の中で、それを再び繰返させて貰ふといふとを非常に有難く思ふのであります。もう大分日が短くなつて參つて居りますし、私は昨年九月以來京都の方へ參つて居りまして、此頃

ちよつと用事があつてこちらへ戻りましたが、どうしても今晩七時の汽車で明朝は京都に歸つて居らぬければならぬ身體であるので、皆さんが御親切に御附合ひ下さつても、私の方が早くしまつて、まだ少し持つて行く物を取纏めなければならぬのである。それで先刻井上さんの御話、唯今は高楠さんが御話下さつて、私共大變心得になると承つて有難く思ふのであります。是も全く此會堂が出来た御蔭であるから、もう御禮を申さなければならぬ次第であります。私が先年名古屋に參つて或る新年に、子供ばかり寄つて居る會で、新年は目出度いが、世の中で一番目出度いことは何か、斯う言つたことがある。さうすると小さい尋常小學校の

言葉で以て私の今日の落慶式に於ける祝辭と致したいのであります。

子供ばかりでありましたが、名前は能く記憶して居りませぬが、其中に一人念佛と云つた子供がある。而もそれが私の言下に直ぐ念佛と云つて活潑な答をした。其處で私が何故念佛が目出度いかと問返したら、直ぐに知らんと潔く元氣の宜い答をした。世界で一番目出度いものは何かと問ふと、念佛といふから感心などを云ふと思つて、何故目出度いかと問ふと、知らぬといふ。其言ひ方が誠にキツパリして居る。知らぬなら知らぬで宜い、知らぬと答へるのは正直である。知らぬなら念佛の話をしてやらうと云ふので、念佛の話をして聴かせた。先刻どうも念佛を唱へる聲は悲しいやうであるといふ御話でありましたが、却つて十年も十三年も前に、名古屋で子供が一番目出度いものは念佛であると云つた。其子供は今日はまだ立派な大人になつて居ると思ふが、今以て心が變らなければ結構である。

其處で私が其の時何ぞ念佛が目出度いかと申したかといふと、南無阿彌陀佛、阿彌陀は無量壽とも無量光とも翻譯する。萬歳々々萬々歳、是れは如何にも目出度い、之れを目出度くないとは云へませぬけれども、

で、そんなことまで言ひ出す必要は無いかも知れませぬけれども、別に今日後で餘興といふことも無いやうに承つて居るから。私が一番後に出ましたから、餘興を兼ねるやうに自然なるかも知れませぬ。世の中に蓄音機と云ふものがありますが、あれは何時も飯を食はぬで宜しいが、吾々の蓄音機は食事をする汽車に乗る。それでありますから十何年前の此求道學舎の記録にありませう。何年何月であつたか、報恩講の勤めを致した後で私に法話をせよといふことで、其處で早速——今までに早や何分以上話せたのであるが餘計なことを言つたです。——私の最も有難く感じたからして話したのは、其頃に私共の行届かぬ話をやはり當會に在つて聴いて下さつた一人が、其時分の『精神界』と云ふ雑誌に私の話した大體を書取つて、出して下されたことを記憶して居ります。本文を読みます。是は私の子供の時分非常に此言葉に依つて眞宗の教の有難い所が知れたとも言へる位に思ふのでありますから、それを言はせて貰ふて今日の責を塞ぎます。歎異鈔の第九條、それならば吾々の方が詳しいと云ふ御方ばかりならば退つて承つても宜しい、其方が樂でございます。

之には限りがある、萬といふ限りがあります。あなたは萬年生きられる、其以上は一年も一刻も生きられぬといふので限りがある。所が阿彌陀は無量壽である、百千萬を以て量るとの出来ない無量壽で、何時までも渝らぬ限りがないと云ふのである。其上に無量光である。太陽の光は強い、電氣の光も明るい、けれども限りがある。阿彌陀の三字はなかなか言ひ現はすとの出来ない即ち無量の光を以て精神の闇を照らす、人間の心の闇を照らす、此阿彌陀の三字には無量壽無量光の意味が含まれて居る。唯六字の中の三字を拾へば、阿彌陀は即ち無量ですけれども、それを無量壽と無量光にする。壽命無量何時までも渝らぬ、光明無量何處までも渝らぬものは何であるか、是です。是ほど渝らぬものはない、之を以て貰かなければならぬ。斯ういふことを斯ういふ風に言つたら、子供に解らうかと思つて話したことがあります。其間に又踴躍念佛と云つて、躍り上るやうに念佛を申して勢を付けるのがあります。斯う云ふ風にありたい。それで之に就て少し申上げて御免蒙ります。私共は何時でも同じことを繰返す人間であります。それで私は斯ういふ御目出度い嚴肅な御席

念佛まうしさふらへども、踴躍歡喜のこゝろあるのかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたさこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきとにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親戀もこの不審ありつるに、唯圓坊おなじこゝろにてありけり。よく／＼案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにていよく／＼往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよく／＼たのもしくおほゆるなり。また淨土へいそぎまいりたさこゝろのなくて、いさ／＼か所爲のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろほそくおほゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまて流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてを

はるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎま
いりたきこゝろのなきものを、ことにあはれみたま
ふなり。これにつけてこそ、いよ／＼大悲大願はた
のもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜の
こゝろもあり、いそぎまいりたくさふらはんには、
煩惱のなきやらんと、あやしきさふらひなましと云
云。

此歎異鈔の御九條を讀上げて随分長たらしく御話した
ことを記憶して居ります。唯圓坊と云ふ祖師見眞大師
の直弟子の一人、本願寺三世の覺如上人の時代まで親
鸞聖人の以後残つて居た、弟子の二十四人の一人です。
此唯圓坊なる者が二ヶ條の不審があつて——今日御集
りの御方々には此二ヶ條の御不審が無ければ結構です
が、私共には大に其不審がありました。所が私を十六
七歳から二十歳の初めまで、時々連れて歩いた、大勢
に對して眞宗の信仰談を致された方、私に取りまして
は私は此先生は私へ聴かせるのであると斯う心得て居
た。その先生の話は常に能く熱心に聴けよと云ふ父兄
よりの注意を受けて、私は従つて歩いたのです。もう早
く亡くなつた人であります。岐阜縣の稻葉道教と申し

て、極く道徳堅固な人でありました。恰度七十五歳で
亡くなつて、一昨年十七年の法事を致しました。此人に
就て今日まで眞宗大谷派僧侶と云ふ肩書を有たして貰
つて居ると思ふから、斯様な御話をする時は何時もそ
の師匠のことを思ひます。「念佛申候へども」——念
佛南無阿彌陀佛を申しまするけれども「踊躍歡喜のこ
ゝろあるそかに候こと」、「踊躍歡喜とは歡ひ喜び踊り躍
ると書いてある。祖師が「天に躍り地に躍る」と云は
れた、嬉しくてならぬことである。どうも口には念佛
を申しますけれども心の底は喜ぶ所ぢやない。心では
さうでないけれども、歡んで念佛を云ふて居ると、他の
人は感心するだらうけれども、其人がさうでないといふ
常に苦しい。念佛は申すが踊躍歡喜の念が疎かであ
る。おろそかとは續かないこと、親しくない疎遠など
である。是が一つの不審である。ぢやもう一つは何か、
もう一つなどは皆さん方も必ずあらうと思ふ。「急ぎ
淨土へ参りたき心のさふらはぬは、いかにとさふらふ
べきことにて候やらん」——佛が淨土を構へて待つて
ござると云ふことを聞くが、どうも行きたくない。皆さ
ん御出てなければ御出てなさい、私は此世の中に自分

唯一人でも行きたくない、それで今日まで生きて居
る。私は唯今六十七である。曇鸞大師は六十有七とな
つて淨土の往生遂げたることは和讃にある。私は六十
七になつたが淨土の往生遂げたくない。御大禮が済
みますか済みませぬに——私は二十二日まで京都に居
つて、二十二日の夜汽車で東京へ來ました。先達中は
信州の方へ行つて居つたが——御承知でせうが十六日
の大饗に二條の離宮に於て大饗の御席に連つて、戻つ
て來てまだ盛んに酒を飲んで居つたさうですが、翌朝
にはもう亡くなつた智利の公使。又十六日の夜には今
日の總理大臣たる大隈さんの御姉さんが、御年は八十
六であるが亡くなつた。此通り男女二人亡なくなつて居
る。男子の方は外國から來た御方であるが、皆さん油
斷なさるといふことを口ではない身體でやつて居
る。大隈さんの姉さんは、吾々よりは上であるが、智利
の公使はまだ五十幾つかである。斯う聞けば驚かざる
を得ぬぢやありませんか。私が斯ういふとあなたの方の
中には、いやあの方は酒を飲んだ爲に死ぬるやうなこ
とになつたのだ、あの方は年を取つて居るから死ん
だのだ、斯う云ふ理窟の出る方もあるかも知れませ

ぬが、決して油斷は出來ない。念佛を申しても踊躍歡
喜のこゝろがおろそかである。又急いで淨土へ参りた
くない。此二ヶ條はどうでありますか。

それだから親鸞聖人も「親鸞も此心ありつるに唯
圓坊同じ心にてありけり」で誰も必ず此心がある筈で
ある。「よく／＼案じ見れば天に踊り地に躍る程に」
程は程度です。どの程度まで喜ぶべきことであるかと
云へば、天にも踊り上り大地も踏破る程に喜ぶべきこ
とである。それ程喜ぶべきことなれば日出度いが、天
に踊り地に躍る程のことを喜ばない、「喜ぶべきことを
よろこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもひたまふ
べきなり。喜ぶべきこゝろを押へて喜ばせざるは煩惱
の所爲なり」煩惱は心の病である、其煩惱の所爲であ
る。然るに「佛かねて」ぢや、佛豫ねてといふのは先
手が向ふにあるといふのである。若しも佛豫て知召さ
ずばです、今日私にも此處へ來て話せといふことでな
かつたならば——恩に被せるのぢやないが、私は今朝
程の汽車で立つてもう今頃京都へ近寄つて居る筈であ
る。それが近角さんの方が先手で以つて、三十日には
求道會館の落慶式をやるので、外の御方にも御頼みし

で置いたが君も来て何か話せ、斯ういふことであつて私が京都から歸らぬ先に態々来て下すつた。それで私は拜見旁参つたのである。先手が向ふにある。此阿彌陀といふ佛が先手である。それですから「佛かねて知召して煩惱具足の凡夫」此大勢の御方には、一人も煩惱のある方が無いかも知れないが私は大有りである。明治四十年頃上野に博覽會のあつた時分、四月一日雪の降つた日であつたと思ひます。見真大師の降誕會を祝つて、其時に多田鼎君が先に出てやつて、後に私がこの歎異鈔第九條を讀み上げました。其外にも何も申すことはない。煩惱具足の凡夫といふことは、煩惱の用意がしてあるといふことである、用意の出来て居るものであるから何時でも直ぐ來ます。今寒いから水では困るから、熱い湯を一杯呉れと云つても、此大勢の方が熱い湯を一杯呉れと仰つしやたら困る。用意がしてない以上サア吞めと云つて出す人はない。所が吾々の煩惱だけはちやんと用意が出来て居る。私が斯う長く御話したら皆さんが後でどう批評なさるだらう、そんなことを心配せずにやれば宜いのであるが心配する、それが煩惱である。そんなやうな工合で何であらうと

煩惱と云ふ心の病は、何時でも出るやうにちやんと用意してある。あの人は惡口を言ふかどうか知らぬといふやうなことを直ぐ思ふ。それを「佛かねて知召して煩惱具足の凡夫と仰せられたる」となれば、他力の悲願は、他力とは如來の本願力である。佛の力は我等の爲め、吾々のやうな一向諸らない者の爲に、南無阿彌陀佛は出来たのでもある。斯ういふ風になつて來ると、自分の詰らないことが知れて來る。益々此ものが目的であるといふことが知れて來るから、非常に力になります。何であらうと自分の腹の据りが付かなければ、人の腹の据りを往けることは出来ないから、自分が先へ從つて行かなければならぬ。さういふ次第のことはゴテ／＼とした話でなくて、實驗上からして信仰といふことの必要は、常に御話になつて居りますことで、其力に依つてかういふ立派な會館が出来たのでありまして、是からは今まで縁の無かつた御方も引寄せられて來るであらうませうが、それが佛の功德即ち佛かねてぢや。第一の不審はそれである。佛豫て知召す、佛の方が先手である、吾々は先手に引起されて今日招かれて來たのであります。來ましても跳付けられれば空しく歸

らなければならぬが、斯うやつて御話するのも佛の先手である、斯ういふ工合である。此祖師の御言葉の意味をもう一層明にすると、『御一代記聞書』に、「とき／＼懈怠することあるとも、往生すまじきかと、うたがひなげくことあるものあるべし。しかれどもはや彌陀如來をひとたびたのみ參らせて、往生決定の後なれば懈怠多くなることの淺猿しや、斯かる懈怠多くなるものなれど御助けは治定なり、有難や／＼とよろこぶこゝろを、他力大行の催促なりと申すと仰せられ候なり。何處まで行つても逃げる事が出来ませぬ。是が一つ。もう一つは急いで淨土へ参りたくない、之に就て面白い話がある。私の子供の時分に聞いた話で今以て面白いと思つて居る。年寄といふ者はそんなことを言ふものであるかと思つて聴いて居つたが、今は私が年寄になりました。斯ういふ立派な會堂は此處に一つよりございませぬが、御寺は何處へ行つても澤山あります。或所に或る年寄が在つて、此附近の或る御寺に毎日行つて參るが、時刻を極めないでやつて來る、さうして佛に向つて何か念佛の外にブツ／＼云うて居る。念佛だけは遠方でも聴くことが出来るが、念佛の

外に何やら言うて居ることは遠方から聴いても分らぬ。其處で或日其寺の小僧が——私共は子供の時寺の小僧であつたが、小僧が其年寄の後へ廻つて來て隠れて聴いて居ると、其年寄が云ふには、老少不定は常に聴かされて居りますが、年若い者がドシ／＼先へ死んで行くのに、私共はまだ残つて居る、もう私共も宜い加減に淨土へ引取つて下さい、全體何時引取つて下さる、昨日も御尋ねしたが、夢にでも御告げ下さるかと思ふて居たが、一向夢の告げもない、斯ういふことを言つて願つて居る。本尊言はず、聖教口無しといふことがあるが、それを知つて言うて居るのなら横着な年寄である。又外の人にあの人は感心ぢや、淨土參りを急いで居る感心な人ぢやと思はせる爲に言ふのなら、尙更横着な所業であるが、全く淨土へ参りたいと云ふので、是程に毎日來て御尋ねしたら、夢の告でもあらうと思ふて、今日も佛様の御返事が無いのを怨んで居るのなら全く感心な老人ぢや。ハ、ア言ふとは解つたから、此年寄本當に淨土參りが、したいのか、一つ試して見てやらうと云ふ者を起して、寺の小僧又其翌日年寄の來るのを待つて後へ隠れる。大概年寄が參詣の人の無い時

を考へてやつて来ることを知つて居るから、もう老人の来る時節ぢやと云ふので、大きな寺の須彌壇の上の本尊の後へ先廻りをして、小さくなつて居ります。老人それに氣が付かないから、やはり前日と同じことを云ふ。昨日も御願ひしたのに、まだ何とも御告げがない、何日の幾日何時何分に私をあなたの浄土へ御引取り下さるか、御聴かせを願ひたいと云ふ。之を後に潜んで居た小僧聴くが否や、二度と言はせるは可愛相ぢや、隠居愁くな今夜引取つてやるぞと、大きな聲でやつた。さうしたら隠居はヤレ有難うございます、是が此世の御禮の申納めであると云つて喜んだならば、此年寄は是まで毎日實際心の底から浄土參りを佛に願つて居つたのであるが、さうでなかつたから老人驚いて、此佛には冗談も云へない、本當に浄土へ引取られては堪らないと云つて逃出した。(聴衆哄笑す) あなた方は御笑ひになるけれども、笑つてしまへばそれまですが、笑ひどろぢやない。私も子供の時には之を聴いて笑つたが、笑ひどろぢやありません。私は今日六十七になつても滅多にそんなことはよう言ひませぬ。引取つてやらうと云はれたらどうしますか、生きて居れば世

の中に仕事が出来ないのであります。大變勝手なことを云ふやうですけれども、私は餘計なことをいふ代りに念佛を言ひます。先達でも恰度大阪の附近の或紡績會社へ參りましたが、あそこには三千二百名女工が居りまして、其うち二千名ばかりは鹿兒縣生れの女で、大概二十歳前後の者である。三千二百名だけの女工が其處に寢泊りの出来る寄宿舎が設けられてあります。其處へ行きましたが、是等の女工は紡績の糸を繰りながら、吾々が聴くと汗の出るやうな文句の流行唄を唄つて居る。私は紡績會社の役員ぢやないから、それをどうか言ふのぢやないけれども、お前達も斯うして佛の教を聴く縁を有つて居るぢやないか。流行唄を三遍五遍唄ふうちに、一遍でも念佛を申して呉れぬかと云ふと、中には笑つて居る者もありましたが、中には大變感じたらしく俯向いて聴いて居つた者もありました。急いで浄土へ參りたくないと言ふとは、今の笑話さうですが、祖師の教はさうではない。「浄土へ參りたき心のなくて、聊か所勞のこともあれば、死なんずるやらんと心細く覺ゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の

浄土はこひしからず候事、誠によく／＼煩惱の興盛に候にこそ」住めば都ぢや。住み慣れた所はどのやうな不便な所でも、都のやうに思はれますから、離れ島へ行つても人が居る、山の中でも可なり人が住まつて居る。況んや輦轂の下に御出でになる方は尙更であります。住慣れた所は都のやうに思ふから離れ悪い。さういふ譯で吾々の心は今日まで迷ひの中にうろたへ廻つて居つた。久遠の昔から彼に死して之に生れ、之に死して彼に生れると云ふ——其中にうろたへ廻つて居つた吾々である。そんな事を聴きに來たのぢやないと云ふ御方があるかも知れませぬが、兎も角も久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はなか／＼捨て難い、「未だ生れざる安養の浄土」實に面白いことを言はれたものである。其處で一つ救つてやらうと云ふ眞宗の教で還相廻向と云ふことがある。浄土から立戻つて今日はこつちの方へ來る人があるが——吾々はどう已惚れても佛の浄土から出て來たやうな値打ちはない。未だ生れざる安養の浄土、是は誠に／＼／＼煩惱の興盛に候にこそ」煩惱は平生興盛を始めずに休んで居るが、愈よ此病氣はどうかといふと興盛が始める。平生は衰へて居りますの

が、灯の消えかゝつた時の様にバツと發する。「名殘惜しく候へども娑婆の縁盡きて力無くして終る時に、彼の土へは參るべきなり。急ぎ參りたき心の無き者を殊に慫慂たまふなり。これにつけてこそ、いよく／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ」斯様に説明がされてみると踴躍歡喜の心もある。「急ぎ浄土へ參りたく候はんには煩惱のなきやらんと怪しく候ひなまし」此身體のある間に命のある間に、煩惱の無くなつた——所謂即心成佛の悟を開く御方を、西方に浄土を構へて阿彌陀佛が待つて御出でになる必要はない。世界中の方が父母に生み落された、此身體が此まゝで即心成佛であると云ふことはない。さういふ方もあるかも知れぬが、私の如きものはどうもさうはいかぬ。それであるから此教によつて自分が安心して、其上で何の時でも今申したやうに、マア流行唄を唄ふ代りに念佛を唱へる、唄を言ふ代りに念佛を言ふ、人の惡口を言ふ代りに念佛、何でも念佛、斯ういふ風になると、念佛程芽出度の言葉はないと云ふのは此處です。是さへあれば何時まで經つても何處までも淪りませんものは佛の心である。心が變らなければ其處へ光明が來

る、明りが来れば闇が去る。其味ひが分つて来れば、非常に世の中も家庭も穏かにいけることであらうと思ふ。

それであるから大勢の人の心の踏迷ひませぬやうに致さんければならぬ。それには先づ人が自分々に其教の眞の味ひを味はつてかゝらなければならぬといふ事を承つて居るが、私だけは其道が充分に分つて居ると云つては申過ぎてありますけれども、此道を求める御方々が此道を踏んで御出でになつたればこそ、佛の道を熱心に御話なさると云ふ斯様な立派な場所が出来ましたので、出来ました上はどうか此處で道を御聴きになつた方が、是からはまだ信心に向つて来ない人を誘ひ導き、所謂自らも信じ人にも教へて信ぜしむるといふことにして戴きたい。世の中の有様を見ると、如何にもあの御方が此宗教の必要と云ふことを感じて下さらぬと云ふことは、實に合點がいかぬといふことは、始終私共が見もし感じもし居る所でありまして、今日どういふことを不足に思ふかといふことを人から尋ねて来たので、昨日の朝簡短に答へて置いたのです。が、如何にも徳育の普及が足らぬ、道徳上の教育が如

何なる方面までも充分行渡つてない事が、今日一番慨はしいことであると思ふ。殊に宗教々育の行届かぬ所があるのは誠に慨はしいから、如何なる御方が御集りの御席であらうとも、吾々は此誠と云ふ道を踏外さないといふことに、腹を極めてかゝらなければならぬといふことを、いろ／＼の方面から話して行きたい、斯ういふのであります。それであるから私は先帝陛下の御製の一首を此處で拜讀致しまして、それで此御話を終ります。

眼に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは

ひとのこゝろの誠なりけり

如何にも神佛の正體は私共肉眼では能く見えぬ。見えぬけれども其見えぬ神に向つても恥かしくないのは人の心の誠であります。然らば何時までも何處までも誠は持たなければならぬ。今日私は吾々の常に讀む御經の中の字を書いて持つて參つて、先刻近角さんに上げて置きました。是は法藏菩薩が世自在王佛を讚嘆なさる言葉の中にあるので

假使佛有し／＼て、百千億萬、無量の大聖、數恒沙の如くならん。一切斯れ等の諸佛を供養せんよりは、

道を求めて堅正にして御かざらんに如じ。

一切諸佛を供養せんよりも道を求むるに如かぬのである。此道といふのが吾々の方から云ふと、本願一實の大道、南無阿彌陀佛といふ一筋を求めて、堅正不徧にして退却したいといふ熱心が無くてはならぬ。一念臨終まで此心が無くてはならぬ。自分一人で解つたやうに大變長く申しましたが、やはり十年前に二十二日に京都でも私共が或る會をやつた時に、四時で終らなければならぬのが四時十分まで押賣りました。が今日も亦例によつて十分程押賣しました。誠に斯様に壯々な會堂が出来まして、皆さん方も是からは是までより

答 辭

甚だ席が高うございますが、こちらから答辭を申述べやうと思ひます。本日は御一同様に於て、御多忙の所をば斯の如く賑々しく御來臨下さいまして、此會館の落成致しましたる御喜びを戴きましたことは、深く

も、ゆつくりと御話を御聴きになることが出来たのは、結構なことでございます。私も亦こちらへ参りましたらば、是非參つて今度は御話を承る方に連りたいと存じますが、どうか皆さんは身體精神共に御健康であつて、今日まで佛敎の何たるを心得ずに御出でになる方に、一人たりとも此敎の味を能く行渡るやうにと、いふことに、御盡力下さらんことを併せて御願ひしまして、さうして此席に上りました所の御喜びの言葉に代へる次第であります。非常に長くなりました、是で終ります。

近 角 常 觀

心に銘記致しまして、感謝を致しまする次第でございます。又唯今は井上先生、高楠先生、南條先生より、御懇篤なる御指導と御敎化を賜はりまして、私自身を始めと致しまして、平素此求道會に集つて居ります所

の總てのものが、深く感謝を致し、且つ御言葉の趣をば服膺致して、益々道を求め大に酬ひ奉らうと思ふのであります。先程より委員の方々より繰返し繰返し仰せ下されたこととありますから、それに就ては大體御諒承を下さいましたこと、存じます。私として、今日は、今日此會館が斯の如く實現致しましたことは、殆ど云ふ所を知らぬと申すの外ございませぬ。自ら顧みて夢のやうな感じが致すのでございませぬ。どういふ譯で斯ういふ風になつたのであるか、又斯ういふやうな工合に而の當り實現したといふ事は、寧ろ不思議である、唯事でないといふより外に、申上げる言葉もないのであります。偏に是れ佛天の御冥祐と、大方諸賢の御同情とによりましたので、先程からいろ／＼御話下さいました、御言葉の自分に關したことは悉く不適切なこととございまして、全く御同情の賜、御慈悲の結晶、白毫の恩賜と、偏に感佩感泣する外はございませぬ。此以上は形ばかりの殿堂を拵へましても、心の裡に於て眞に所謂心は淨土にすみあそぶと云ふ所の殿堂が築き上げられなんだならば、何の所詮も無いこととございするに依つて、どうぞ此見える殿堂に應はし

き心の殿堂を築き上るやうにしまして、御好意に酬ひたいと思ふのでございませぬ。

今日此日を卜して開館式を擧げて戴くことになりましたことは、偶然のこと、は云ひながら、甚だ奇しき因縁と申しまするは、聖德太子様が四天王寺をば御建立なされたのが、推古天皇の三年乙卯の年でありまして、本願緣起には正月八日と書いてあるのでございませぬ。それから六百六十年を経まして、恰度建長七年乙卯の歳十一月晦日親鸞聖人が今の聖德太子の緣起を據所と致されまして、『聖德太子奉讃』と云ふものを書かれました。其奉讃の終りには

四四

憲章の第二にのたまはく、

三寶にあつく恭敬せよ、

四生のついのよりとて、

萬國たすけの棟梁なり。

いづれのよいつれのひとか歸せざらむ、

三寶よりまつらば、

いかでかこのよのひと／＼の

まかれることをたゞまし。

とめるものゝうたえは

いしをみづにいろ／＼かことくなり、
ともしきものゝあらそひは
みづをいしにいろ／＼にたりけり。

南無救世觀音大菩薩

哀愍覆護我

南無皇太子勝鬘比丘

願佛常攝受

皇太子佛子勝鬘

是緣起文納置金堂

內監三可_三披見一手跡猥

乙卯歲正月八日

拜見奉讀人者

南無阿彌陀佛

可唱々々

建長七歲乙卯十一月晦日書之

愚禿親鸞 八十三歲

とあります。此建長七年乙卯の歳より又六百六十年を経ましたのが、唯今大正四年即ち本年乙卯の歳、本日十一月晦日と相成ることとあります。勿論初めよりさういふ深い計畫で進んだのではありませぬが、恰度此時

分に及んで落慶式を擧げる日割になつて参りました。殊に本年は大正の御代に於きまして御即位式を擧げられまして、御承知の通り本日恰度御即位式御大禮の最終日、御治定日の今日が恰度最終に相成る事でありませぬ。政治上の大維新と云はるべき大正の御代の初めに於て、恰度此聖德太子の御因縁、又今申します親鸞聖人の御因縁、六百六十年を重ね重ねて、今日此日に於て御一同と共に此佛前に於て篤く三寶に歸敬し奉つて、皇太子の思召をば服膺し、又親鸞聖人の「朝家の御爲め國民のため念佛申し合せ給ひ候はば目出度候べし」といふ思召を御戴きして貰ふことの出来るのは、芽出度き御因縁と返す／＼も感謝を致す所であります。此御因縁をば頼と致しまして、甚だ不肖な自分でありませぬので、平日致して居ります事柄に就ても、行届かぬ勝ちのものでございませぬが、どうか此三寶歸敬の軌道に依りまして、一般の人々と共に、此如來の廣大の恵を戴き、唯今御述べになりました本願一實の大道に歸して、共に尊き涅槃の本懷を遂げまして頂きたいと思ひます。

本日は皆様か斯の如く賑々しく御來臨下されて、此

落慶式を御莊嚴を下さつたといふことは、返す／＼も感謝の至りでございます、どうぞ是をば本と致しまして、嚮後淪りなく共に此廣大な道に御竭しありたいといふことを偏に御願ひ致します。感激のあまり言葉も整はず、前後何を申し上げたか自ら知らざるやうなことでありまして、唯々皆様の御好意を感謝致します次第

來賓芳名

落慶式當日並に記念講演に來臨を辱ふしたる來賓諸君、多數に上りたるは、深く光榮として欣幸措く能はざる所なり。憾むらくは、一々詳細に芳名を録するの便を得ざる事なり。茲に御持參を得たる招待狀に依りて芳名を謹録し、度んで御誠意を感佩し奉り、満腔の謝意を表し奉る。

大谷 登 韶殿 大谷 勝眞殿 井上 圓了殿
伊東 大忍殿 泉 道雄殿 今井 獎輔殿
稻垣 實秀殿 岩上 行波殿 一音 寺殿
岩田 作兵衛殿 今井 彌五郎殿 和泉 鐵次郎殿
伊藤 常吉殿 伊藤 龜雄殿 井口 乘海殿

今井 甚太郎殿 池田 岩三郎殿 池谷 玉穂殿
磯野 元吉殿 石井 彦治殿 磐井 殿
石 井 殿 伊東 泰雄殿 今井 國太郎殿
今井 愛之助殿 石原 時之助殿 橋本 秀邦殿
林 龍三郎殿 林 平藏殿 服部 福太郎殿
原 啓殿 橋本 邦雄殿 原 基殿
原田 俊之助殿 西澤 善七殿 西村 清殿
堀 謙 德殿 保倉 一道殿 堀 秀巖殿
法 友 會殿 法 雲 寺殿 細野 純弘殿
星子 壽一郎殿 常磐 大定殿 戸田 繁次殿
外山 彌助殿 登坂 秀興殿 百目木 智雄殿

であります。殊に今日は能々御來臨下さつたにも拘らず、甚だ不行屑勝て又何等の風情もないこととてござましたが、其邊は宜しく御宿しを戴きまして、どうぞ各部をば御ゆつくり御覽下さるやうに願ひたう存じます。甚だ整はぬことをば高い所から申上げました。

常磐 隆澄殿 東條 喜一殿 德久 乙吉殿
千野 要之助殿 大森 禪戒殿 荻野 仲三郎殿
生沼 曹六殿 大谷 學生會殿 大伴 義正殿
岡田 小三郎殿 岡田 九八郎殿 大崎 林吉殿
太地 周三郎殿 大河内 貞殿 大江 精一殿
小野島 行薰殿 往古 常次郎殿 大橋 甚太郎殿
渡邊 海旭殿 和田 鼎殿 和田 幽玄殿
渡邊 順慶殿 渡邊 源作殿 渡邊 源十郎殿
河瀬 秀治殿 鼎 義曉殿 加藤 知學殿
金子 大榮殿 神野 進壽殿 禿氏 祐祥殿
河野 利助殿 神山 茂兵衛殿 金 津 殿
片野 鐵次郎殿 米澤 竹三郎殿 横川 利吉殿
吉田 侶吉郎殿 高楠 順次郎殿 龍口 了信殿
高田 道見殿 田中 善立殿 高島 圓殿
武田 慧宏殿 高岡 隆瑞殿 多田 賢順殿
瀧澤 三郎殿 高橋 寅五郎殿 田中 敬信殿
竹橋 清太郎殿 高橋 篤雄殿 土倉 是空殿
塚原 秀峯殿 土倉 余三殿 塚本 丈助殿
南條 文雄殿 長尾 收一殿 中村 金藏殿
内藤 智秀殿 中里 庄五郎殿 永孝 順殿

村本 三郎殿 植野 勳殿 植野 明殿
内堀 健藏殿 内堀 末松殿 内堀 桑次郎殿
來馬 琢造殿 久留 只一殿 熊代殿
山本 貫道殿 山中 見道殿 山岡 超舟殿
山名 龍宣殿 八十島 保太郎殿 八十島 慈殿
八十島 猛殿 矢留 文雄殿 山 田 殿
山本 金太郎殿 柳瀬 留次殿 前田 慧雲殿
松本 三郎殿 丸山 環殿 松崎 壽三殿
増子 賢慧殿 松村 德松殿 丸茂 猛殿
松本 順榮殿 前田 清次郎殿 松本 陸藏殿
松井 房吉殿 松下 定吉殿 早稻田大學教友會殿
松井 幸植殿 房岡 義成殿 深萱 英次殿
藤川 正連殿 古崎 彊殿 福地 茲憲殿
藤川 昇造殿 小林 嘉平治殿 近藤 泰圓殿
富士田 秀暎殿 小南 英策殿 小柴 大次郎殿
近藤 秀暎殿 小澤 傳兵衛殿 小澤 一殿
小西 金治殿 小澤 順一殿 延壽寺 唯稱殿
是利 太郎殿 遠藤 順一殿 延壽寺 慧眼殿
江間 謹次殿 手塚 光貴殿 寺田 慧眼殿
安達 憲忠殿 安藤 正純殿 安藤 嶺九殿
華名 慶一郎殿 華原 雅亮殿 淺野 純明殿

安藤 兼淳殿	淺野 玄秀殿	有田 廣殿	石井 かつ子殿	一森 安子殿	石井 峰子殿
淺野 孝之殿	東虎二郎殿	荒井 平吉殿	原 夫 人殿	新名 たみ子殿	別府 とく子殿
秋井 繁之助殿	佐竹 觀海殿	佐竹 智應殿	戸田 松子殿	萩野 母堂殿	萩野 あい子殿
澤野 祖夫殿	坂戸 哲舟殿	佐々木 肇殿	岡田 えつ子殿	岡田 みつ子殿	岡田 かめ子殿
佐治 由吉殿	佐保田萬四郎殿	酒井 宗三郎殿	生沼 とり子殿	岡部 民子殿	岡部 はる子殿
北村 教嚴殿	及能 謙一殿	木村 龍寬殿	大塚 ひさ子殿	渡邊 操子殿	河野 せき子殿
橘地 龜次郎殿	經塚 巳之助殿	黃葉 秋造殿	柏原 あき子殿	樺島 章子殿	加藤 てる子殿
三間 隆次殿	光田 幸次郎殿	宮島 殿	加太 みどり殿	春日 政子殿	加藤 さく子殿
三好 榮光殿	宮本 金次郎殿	三好 榮世殿	吉岡 さく子殿	横田 たま子殿	高松 君子殿
宮島 信吉殿	柴田 一能殿	白山 謙致殿	高楠 夫人殿	俵 夫人殿	玉塚 豐子殿
四恩 爪生會殿	清水 俊榮殿	白土 幸力殿	田中 美那子殿	高橋 しげ子殿	高橋 はま子殿
新公 論社殿	白土 成允殿	清水 石松殿	長尾 かず子殿	長屋 ひさ子殿	村井 母堂殿
島田 庄治郎殿	重村 義一殿	柴山 清一殿	村井 千代子殿	宇野 はつ子殿	植野 文三殿
新堀 哲岳殿	繁山 德治殿	桐山 錦光殿	野田 操子殿	野澤 仲子殿	野澤 母堂殿
開定 次郎殿	森 道本殿	森田 恒一殿	野澤 みつ子殿	桑原 三つ子殿	山岡 政子殿
森江 英二殿	菅瀬 芳英殿	鈴木 龍司殿	八十島たゞ子殿	山本 とみ子殿	松本 千代子殿
菅原 智廣殿	鈴木 弘殿	隅山 廣吉殿	九茂 むね子殿	九茂 ふみ子殿	松本 要子殿
杉江 作二郎殿	諏訪 仁殿	岩田 淳子殿	増村 夫人殿	松田 さと子殿	松本 みよし殿
大谷 夫人殿	石井 須磨子殿	今井 母堂殿	前田 はる子殿	増田 玉子殿	牧田 久子殿
家村 錦子殿	池田 澤子殿		藤瀬 夫人殿	古崎 夫人殿	小出 はや子殿

祝電祝辭披露

小熊 まさ子殿	小林 しづ子殿	小澤 はる子殿	見澤 よし子殿	水谷 わき子殿	清水 かつ子殿
姉崎 そて子殿	綾部 夫人殿	東らん子殿	檜山 夫人殿	森 榮子殿	森 京子殿
佐竹 母堂殿	酒井 ふさ子殿	及能 いそ子殿	森口 やすえ殿	千秋 よし子殿	千田 てる子殿
三好 夫人殿	三宅 しづ子殿	湊 錦子殿	菅瀬 夫人殿	末繁 義子殿	杉野 きん子殿

落慶式當日各地より懇切なる祝電祝辭を辱うしたるは光榮として、深く感謝する所也。謹んで芳名を録して、御厚意を拜受し奉る。猶此已外に記載洩となれるものなきを保せず、勿卒の際御寛恕あらんとを祈る。

祝電拜受芳名

大谷 盤誠殿	大谷 殿	原 卓一殿
橋爪 又三郎殿	西川 虎吉殿	豊田 吉殿
本多 慧孝殿	堀 勇吉殿	峠 延吉殿
徳田 潔殿	千原 圓空殿	太田 秀穂殿
大原 達道殿	大溪 專殿	小川 殿
和才 誠司殿	加藤 咄堂殿	貝島 御一族殿
梶井 研九殿	吉田 藤吉殿	武田 五一殿

祝辭拜受芳名

犬養 毅殿	板橋 盛俊殿	市野原彌太郎殿
秦義 輔殿	西川 新十郎殿	本多 春學殿

法友會殿	星竹藏殿	富岡教雲殿
大谷瑩亮殿	太田秀穗殿	沖本重一殿
岡田彌作殿	渡邊良法殿	加藤玄智殿
河井臥龍殿	河崎順殿	鼎義曉殿
上岡市太郎殿	吉田靜致殿	田中弘之殿
高田儀光殿	武內義淵殿	武田五一殿
高崎修養會殿	土屋詮教殿	堤重藏殿
檜原龍誓殿	向坊久五郎殿	宇野先承殿

求道會館落成式始末

を以て、此四天王寺本願緣起を據として、皇太子聖德奉
讃を草したまひき。爾後六百六十年を経て大正四年乙
卯歲となりぬ。必しも年を數へ、歳を算して此年を卜
したるにはあらず、自然の結果此に至りたるも亦不可
思議の因縁といふべし。乃ち度て兩聖を紀念せんがた
めに、十二月三十日を卜して落慶式を舉ぐるこゝとな
りぬ。而して之に適當せる剏切なる記念品を頒たんと
欲して直に想到りたるは、親鸞聖人直筆の聖德太子奉
讃たりき。世間斷片として其和讃數首の散在するを見

讚全部七十五首完全にして存在せるは高田派本山專修寺所藏あるのみ。特に其奥書に於て聖德太子の乙卯歳と親鸞聖人の乙卯歳とを列記せるが如きは、他に決して之を見るべからず。忽然として以爲らく、若し同奉讚直筆の一部を撮影して之を頒つことを得んか、是絶好の紀念物なりと。十一月八日再從妹の喪に當り、郷に歸り、十一月十日卽位大禮の日偶々江州我寺に在り、謹んで此日を以て書を裁して我か有縁の善知識なる大谷派法主臺下に奉り、會館の落成を告げ奉ると同時に、亦高田派法主輪下に書を裁して、聖人の直筆の撮影を懇請し奉る。數日を経て武内執事より恩許の報を傳へらる。乃ち特に技師を伊勢に特派して高田山重寶たる聖德太子奉讚五葉を撮影せしめらる、文字は左の如し。

聖德太子ノ御名オハ

八人シテ一トニ奏スルコトヲ
マサストイフコトバナリ
一度^下ニキヨシメスユヘニ

厩屋門ムマヤトノ皇子トマフシケリ
ハ耳シ皇子トマフスナリ
ワウコウ

七十三
ケンシヤリ
ダイニ
憲章ノ第二ニノタマハク
ホリ
クキヤウ

三寶ニアツク恭敬セヨ
四生ノツイノヨリトコロ
萬國タスケノ棟梁ナリ

七十四
イツレノヨイツレノヒトカ歸セサラム

三寶ヨリマツラスハ
イカテカコノヨノヒトノ
マカレルコトヲタサマシ

トメルモノ、ウタエハ

イシヲミツニイル、カコトクナリ

トモシキモノ、アラソヒハ

ミツヲイシニイル、ニニタリケリ

南無救世觀音大菩薩

哀愍覆護我

南无皇太子勝德比丘

願佛常攝受

皇太子佛子勝德

是緣起文納置金堂

内監不可披見手跡猥

乙卯歲正月八日

拜見奉讀人者

南無阿彌陀佛

可唱々々

建長七歲乙卯十一月晦日書之

愚 禿 親 鸞 三歲

實に聖德太子の御名と、十七憲法第二章並に五章及聖人の聖德太子に對する歸敬と、天王子本願緣起の乙

卯歳の奥書及聖人自身の和讃の乙卯歲奥書となり。此日恰も 陛下大廟御參拜の日に當る。此日を以て篤敬三寶の憲法を奉寫す。深き意義ある記念と謂つべし。中外日報の和田對白君、偶々高田山に詣し、恰も撮影後其眞本を拜見し、歸來其直話をきいて、其眞筆の超脫天真聖人の眞面目を髣髴たらしめたるを知る。技師歸來其種板を示すに至りて果して其言の如く、恰も六百六十年前の聖人に謁するの感あり、歡喜措く處を知らず。年を涉り、日を涉り、其教化を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎といひ、其見寫を得る徒、甚以て難しと聖人が感泣したまひし昔を偲ひたてまつらすんはあらず。茲につゝしみて此の如き秘藏の重寶を撮影せしめられし恩恵を感謝し奉る所也。

會館の工事の狀況は、前號に於て大體概説せしが如く、京都工藝學校の教授工學博士武田五一氏の甚厚なる同情を以て、設計全部の寄附を辱うし、島田庄治郎氏を以て現場監督の任に當らしめらる。五月一日起工以來着々工事進捗し、特に八月上棟式の如きは武田博士態々來京して獎勵指導に勉めらる。實に會館建築に關しては、徹頭徹尾同氏の理想設計の下に、堅實高雅なる

建物を實現することを得たるは、全く同氏の高恩なり。而して之か實行の任に當りて始終一誠、利益を眼中に措かず、親切と着實とを以て飽迄之を貫徹せられたるは、全く請負師戸田利兵衛氏の厚意たらざるばあらず。而して現場に於ける代表者服部及び棟梁杉江以下大工必死の盡瘁を以て、遂に落慶式定日までに全部竣功するに至れり。特に其前夜數日間の如きは夜業を開始し、其前夜の如きは殆んど徹夜を以て努力し、遂に立派に落成を告ぐるに至れり。而して一面には會館御本尊は一昨年一月十五日中根慶信奉持し來りてより以來、有縁の御佛として給仕し奉る處なり。而して今回高村光雲氏指揮の下に、臺座及後背を修幅し奉りしが、是亦愈落慶式當日の朝を以て完成するを待ちて、謹んで奉迎安置し奉れり。かくの如く諸方面豫定の如く着々進捗して、愈々定日の三十日とはなりぬ。而して之か準備としては我求道會御同朋、晝夜を辨ぜず、或は全國寄附者に落成報知の書面を出し、又落慶式招待状を出す。或は帽子外套の受取所を設け、或は下足場の設をなし、特に接待方法につきて種々苦心經營の結果、唯茶菓を饗し、記念品として前記聖人の直筆ニロタイ

ブ一卷つゝを頒ち、寧ろ深く來賓諸氏の厚意を感謝して、精神的に誠心誠意款待することとし、部署を定め各方面遺漏なからしむべく準備せり。かくして愈待ちに待ちたる大正四年乙卯歲十一月三十日とはなりぬ。

此日清朗天一點の曇を止めず、瑞雲飄渺として祥氣天地に溢る。會館表見附巍然として半空に聳え、裝飾煉瓦瀟灑として記字くづしの意匠は、五連窓の菩提樹模様のステンド玻璃と相對して、清新なる求道の精神を表象し、稻田石の大基石と橢圓形の玄關柱は、自ら剛健跌宕の氣をあらはし、屋上左右一對の鐵鑄の燈籠は實に無明長夜の燈炬と謂つべし。前日俄かに植込みたる樹木は、右には槎枒枝を雜へたる取越の松樹を以てし、左には青桐の幹太くして數株趣をなす、何れも牆を隔て、隣の植込と接續するも面白し。玄關左には木犀の大株を以てし、左には棕櫚數株高く聳えて煉瓦と相映して一層建物を引立たしむ。而して左右大基石の上には、左には丸茂氏の寄贈にかゝる棕櫚竹數十株藍々として植込みたる鉢を安んじ、右には有田氏の寄贈にかゝる五葉松の高幹一株を以てす。玄關に入れば正面の六角堂形の御堂は純然たる日本造の眞髓を顯はし

白木の檜は砂金の裏張附と對映して、益々清新の氣に満ちり。階上小會堂は階上ガレリと共に青疊の匂清らかに、二間の大床には豫て下賜したまひたる法主臺下及兩連枝の三幅對の書を掲げ、階下の西洋室二間には、各ストブ飾の上に花瓶を置き、學舎多年の講話の間は、今日を名残り婦人方控所に當てられぬ。かくて求道會の御同朋全力を傾注して接待に盡力せられぬ。定刻午後一時に到れば來賓諸氏續々として入來せられぬ。階上階下の控室には既に充滿して、會堂及ガレリの間を往來して、建築構造に對する賞讃の聲噴々たり。午後二時を報ずれば、かねて、四國長尾猛師の寄贈にかゝる白峰山産の磬石を打鳴らし、開會を報ずると共に、階上階下整然として皆席に著し、乃ち左の順序を以て進行す。

式次

- 一 挨拶 長尾 収 一氏
- 一 禮讃文
- 一 經過報告 荻野 仲三 郎氏
- 一 會計報告 西澤 喜 七氏
- 一 演說 井上 圓 了師

- 一 演說 高橋 順次 郎氏
- 一 演說 南條 文 雄師
- 一 答辭 近角 常 觀

以上

先づ長尾収一氏開會の挨拶を終り、近角進みて佛前に禮拜し、三歸を唱へ、東方の偈を誦し、終りに廻向文を唱ふ。佛天の冥祐を以て多年待設けたる會館茲に實現し、内外の來賓雲集しまひ、謹んで佛前に於て禮讃文を誦したてまつる、豈無上の感慨なからんや。唯々恩徳の廣大なると同情の横溢せるに感泣するのみ。其禮讃文左の如し。

禮讃文

會主代リテ獨リ之ヲ唱ヘ會衆一同默唱シテ之ニ和ス

一同起立(階上は正座)

第一點 三歸

○一切恭敬、自ら佛に歸依し奉る、當に願くは衆生と共に、大道を體解して、無上意を發さん。
自ら法に歸依し奉る、當に願くは衆生と共に、深く經

藏に入て、智慧海の如くならん。
自ら僧に歸依し奉る、當に願くは衆生と共に、大衆を統理して、一切無碍ならん。

一同着坐

第二點 歎佛偈

○東方諸佛の國、其數恒沙の如し、彼土の菩薩衆、往て無量覺を觀たてまつる。
南西北四維、上下亦復然り、彼土の菩薩衆、往て無量覺を觀たてまつる。
一切の諸の菩薩、各天の妙華、寶香無價の衣を齎て無量覺を供養したてまつる。
威然として天樂を奏し、和雅の音を暢發し、最勝尊を歌歎し、無量覺を供養したてまつる。
神通と慧とを究達して、深法門を遊入し、功德藏を具足し、妙智等倫なし。
慧目世間を照して、生死の雲を消除す、恭敬して遶ること三市して、無上尊を稽首したてまつる。
彼嚴淨の土の、微妙にして思議し難きを見て、因て無上心を發して、我國も亦然らんと願す。

時に應して無量尊、容を動して欣笑を發し、口より無數の光を出して、徧く十方の國を照す。
回光身を圍繞すること、三市して頂より入る、一切の天人衆、踊躍して皆歡喜す。
大士觀世音、服を整へ稽首して問ひたてまつる、佛に白ふさく何によりてか笑みたまへる、唯然り願くは意を説きたまへ。

梵聲は猶し雷震の如し、八音妙響を暢へて、當に菩薩に記を授くべし、今説ん仁諦に聽け。
十方より來れる正士、吾悉く彼の願を知る、嚴淨の土を志求し、受決して當に作佛すべし。
一切の法は猶し夢と幻と響との如しと覺了すれども諸の妙願を満足して、必ず是の如きの刹を成ぜん。
法は電と影との如くなりと知れども、菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具して、受決して當に作佛すべし。

諸法の性は一切空無我なりと通達すれども、専ら淨佛土を求めて必ず是の如きの刹を成ぜん。
諸佛菩薩に告げて、安養の佛を觀せしむ、法を聞て樂しんで受行し、疾く清淨の處を得よ。

彼嚴淨の國に至りなば、便ち速かに神通を得、必ず無量尊に於て記を受けて等覺を成ぜん。其佛の本願力、名を聞て往生せんと欲は、皆悉く彼の國に到らば、自ら不退轉に致らん。菩薩至願を興して、己が國も異ることなからんと願す、普く一切を度せんと念ひて、名顯かに十方に達せん。

億の如來に奉事し、飛化して諸刹に徧ねく、恭敬して歡喜して去いて、還て安養國に到らん。若人善本なければ、此經を聞くことを得ず、清淨に戒を有てる者は、乃し正法を聞くことを獲。曾し更に世尊を見たてまつるもの、則ち能く此事を信ぜん、謙敬して聞て奉行して、踊躍して大歡喜せん。

憍慢と蔽と懈怠のものは以て此法を信し難し、宿世に諸佛を見たてまつれば、樂んて是の如き教を聴かん。聲聞或は菩薩、能く聖心を究むるもの莫し、譬へは生れたるより盲なるもの、行て人を開導せんと欲ふが如し。

如來の智慧海は、深廣にして涯底なし、二乗の測る所に非ず、唯佛のみ獨り明らかに了りたまへり。假使一切の人、具足して皆道を得、淨慧本空を知り、億劫に佛智を思ひて。力を窮めて極めて講説して、盡を盡すとも猶佛慧の邊際なきことを知らず、是の如くして清淨に到る。壽命甚だ得難し、佛世亦値ひ難し、人信慧あること難し、若聞かは精進して求めよ。法を聞て能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶はゞ、則ち我善き親友なり、是故に當に意を發すべし。設ひ世界に滿てらん火をも、必ず過て要めて法を聞かは、會す當に佛道を成して、廣く生死の流を度すべし。

廻向文

○願くは此功德を以て、平等に一切に施し、同しく菩提心を發して、安樂國に往生せん。 第三點

引續きて荻野仲三郎氏經過報告をせらる。同氏は會館設立の當初より終始を貫徹して盡力せられ、特に武田

工學博士を紹介せられたるは、同氏並に亡友の西川藤吉氏なり。會館設立の精神と經過につきて委曲を盡したるは別項記載の如し。次で西澤善七氏會計の報告をせらる。同氏亦三十六年第一回敷地購入の當時より會計の任に當られ、終始渝らす盡力せらる。同氏を紹介せられたる大草慧實師を追懷すること轉切也。

引續きて井上圓了氏、高橋順次郎氏、南條文雄師、三博士の演説あり。何れも親切懇情到らざる所なく、井上氏の高邁超脱して諧謔輕妙なる、高橋氏の剴切痛刻にして骨を刺し手に汗を握らしめ、感奮激勵せしめたる、南條師の溫潤含蓄德風自然なる、何れも別項記載の速記によりて親炙するを得べし。近角度んで答辭を捧げ會を閉ぢぬ。階上階下電燈赫きて晝の如く、混漾浩汗如來光明の照耀中に散會を告げぬ。

猶豫定の如く、十二月一日より午前は十七畫法を講し、夜は公會の講演を開く。第一夜は武田慧宏師第二夜は荻原雅亮師、何れも親切に自身の實験を披露して、求道獲信の指導を與へらる。猶第一日は茶話會を開きて態々上京せられたる福岡縣の有田廣氏福島縣の和泉鐵次郎氏林龍三郎氏林平三氏佐治由吉氏の爲めに歡迎感

謝の意を表す。而して第三日は報恩講を修して信仰談話會を開き、夜は講話後御傳鈔を拜讀せり。此日を以て階上小會堂に宗祖御眞影聖德太子御像及内佛御本尊を安置し奉る。遂に永久之を奉安することとなしぬ。落慶式後内外幾多の信仰の因縁に遇ひ奉り、益々慈光の休息なきを仰ぎ奉る。噫、佛閣某固うして遙かに、梅里梨耶の三會に及び、法水流遠くして普く六越四生の群萌を潤さんことを、謹て乞ひ奉る。

●求道日曜學校近況

開設以來既に一年有餘、常に兒童を得るに困難して居た求道日曜學校も、幸に會館の落成と共に適當なる教室を得、漸く盛況に向はんとする機運に至つたは、同人の深く喜びとする處であります。一方同人側において、過去一年有餘の経験にて、おそまきながら教化上多少光明を認むる所もあり、益々策勵して微力を致させて貰はうと思つて居ります。時間も會館の落成と共に、午前八時より一時間と改め、朝の集りは専ら兒童が一回生徒會なるものを設け、この時に於て充分自由に各意志のまゝ、樂みを盡くし得るやうの方針に仕組みました。此頃にては毎同朝の集にても出席兒童約六十名を數へます。

釋迦嚴父の抑止、彌陀悲母の引接

近 角 常 觀

五八

大經五惡段の説法

一 先達て落慶式後は、朝夕佛前て『讚佛偈』を讀まして貴ふを御縁として、『讚佛偈』を據所としてお話して居る事である。『讚佛偈』は、諸佛菩薩が阿彌陀佛の淨土に詣うて、佛を讚歎し給ふ偈であれば、夫れ程に阿彌陀佛の本願が一切諸佛に超え勝れ給ふといふは何處であるか。是れが第一の問題であります。

二 今その意味を手短に申せば、一切諸佛の教えは諸惡莫作衆善奉行である。有らゆる善は之を修し、有らゆる惡は之を廢し、自らその心を清ふして佛境界に到るとの教である。寔に結構な尊き教であるが、如何せん私共實際に於て、眞地目にその如く行はんとしでも行ふことが出来ぬ。

三 これは此の淨土教の上でも、この『大經』なる經は、或る翻譯には『過度人道經』の名がある程で、全體私共が眞地目に守るべき人道を説き給ひた經である。中で

も下卷には彼の名高い五惡段がありて、五惡を誡め、五善を勧めるとお説きなされてある。この五惡段の所など、之を讀むと、凡そ一言一句として私共の心に當たらぬといふ箇所は無い。殘らず私共が日常生活に於ける淺ましい處をお書きなされてある。一二箇所を擧げて見ると、

其一惡とは、諸天人民蠕動の類、衆惡を爲さんと欲して皆然らざるは無し。強き者は弱きを伏し、轉相剋賊して殘害殺戮し、迭に相吞噬す。善を修することを知らずして惡逆無道なり。云云。

其二惡とは、世間の人民、父子兄弟室家夫婦、都て義理無くして、法度に順ぜず、奢嬌嬌縱にして、各意を快うせんと欲ひ、心に任せて自ら恣に更相欺惑す。心口各異にして言念實無し。佞諂不忠にして言を巧にして諛ひ媚び、賢を嫉み善を謗りて、怨枉に陷入る。主上明らかならずして臣下を任用すれば、

臣下自在にして機偽多端なり。云云。

其三惡とは、世間の人民相因て寄生して、共に天地の間に居す。處年壽命能く幾何なること無し。上に賢明長者尊貴豪富あり、下に貧窮厮賤庶劣愚夫有り中に不善の人有つて常に邪惡を懷けり。但嬌佚を念ひて、煩胸の中に滿ち、愛欲交亂して坐起安からず、貪意守惜して但唐に得んことを欲ふ。細色を眇睽して邪態外に逸なり。自ら妻を憎みて私に妄りに入出す。家財を費損して事非法を爲す。云云。

其四惡とは、世間の人民、善を修せんことを念はず轉相教令して共に衆惡を爲す。兩舌、惡口、妄言、綺語、讒賊鬪亂して善人を憎嫉し、賢明を敗壞し、傍に於て快喜す。二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信なくして誠實を得難し。尊貴なれば自ら大にして己道ありと謂ひ、横に威勢を行じて人を侵易す。云云。

其五惡とは、世間の人民、徙倚懈惰にして、宵て善を作し身を治め業を修せず、家室眷屬飢寒困苦す。父母教誨すれば目を瞋し響を怒らして。言令和ならず、違戾反逆すること、譬えば怨家の如し。子無き

に如かず。取與節なくして衆て共に患へ厭ふ。恩に負き義に違して、報償の心有ること無し。貧窮困乏にして復得ること能はず、辜較縱奪して放恣に遊散す。數唐に得るに串て用ゐる、自ら賑給す。酒に耽り美を嗜みて飯食度無し。心を肆にし蕩逸して魯扈抵突たり。云云。

斯く私共の守る可き人道を説き給ひたが、五惡段の説法であります。

抑止の文と親鸞聖人

四 處て五惡段に斯くあるは何故かといふに、御承知の如く『大經』には、第拾八願に於て阿彌陀佛の本願を説くに、「設ひ我佛を得たらんに、十方衆生至心信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らず」と、斯く悉く救ふと仰せられた後に、

唯五逆と正法を誹謗するをば除く。

と、取除けが附加せられてある。全體本願に於て悉く救ふとあるに、斯く取除けが設けられたといふは、これは釋迦の抑止と申して、釋尊が私共を誡めて下されたお言葉である。この誡めの御一言が下卷になりて五

惡段の說法となり、世間の人民等これの惡事があると、ひし／＼私共の心中を抑えてお説きなされた譯である。故に五惡段を讀むと、一言一句が私共日々の行ひに的中する。

五　これは現に私が煩悶した時に、この五惡段の文を書いて苦んだことがある。その時自分に當ると思ふ一句々々に點を打つた、今もそれが残つて居ります。苦しんだ時だから、有難い處へは一つも打つて無い。悪い所／＼と打つてある。これが即ち唯除五逆誹謗正法とある抑止のお言葉に基くものにて、釋迦嚴父のきびしき御誡めてあります。

六　而してその釋迦の御誡めなることは、即ち一切諸佛の教え給ふ諸惡莫作衆善奉行の教である。これは釋尊御一代の教にしても、飽く迄戒定慧の三學を守り、何處迄も善をして行けといふ仰せの外に無い。而して三世十方過去七佛の教へも皆な之になる。即ち之から今の唯除五逆誹謗正法のお言葉も出て來た譯であります。處てこのお言葉は　實に嚴しいお言葉である。如何に阿彌陀佛の本願と言はふが五逆と正法を誹謗する者は助からぬといふ激しいお言葉である。

九　これは現に日本の思想界にしても、問題は之れ一つになつて居る。一方眞地目なる思想よりは、飽く迄正しくせねばならぬと考えて、その通り實際に行ふことに努力する。處がその結果は反對に、寧ろ滔々として行ひ難き方面に趨つて居るといふ状態である。之に於てか初めて諸佛に超え勝れた彌陀の本願あることが、現はれ興つて下されなければならぬといふ筋合にある。

一〇　私は考えますに、全體從來眞宗の人が、これ迄に親鸞聖人が抑止のお言葉を重視してお出になるに係はらず何うも其の意味が充分徹して無いやうにある。初めからこれだけは不要視して、悪くてもお助けと輕いことに取つて居るから、釋尊の仰せられた意味合が薩張り明になつて居無い。偶俗諦門を喧しく言ふ人は釋尊所説の五惡段は俗諦故、「善をせんならぬのぢや／＼」と、その儘自分に當てがつて、そして「出來ぬから可ぬ／＼」と泣いて居る。これでは一方に力説して下された彌陀の本願といふ味ひが全然消えて居るから安心されやう筈が無いのである。

一一　さすれば今私共の頂く可き點は何處にあるか。何時も繰反す例の福島縣の或る物持の方の嘶である。

七　然るに茲に氣をつく可きは、親鸞聖人がこの拾八願の文を書いてお出になるのを見るに、如何なる場合にもこの唯除五逆誹謗正法の文が落ちてゐるのか無いことである。私は此間或る御宅に參りて内佛を拜んだ。法主臺下の名號か懸けてあつて、名號の傍に矢張りこの御文が書いてあつた。私共にすれば此の御文は寧ろ取つて置き度い程に思ふのに、親鸞聖人は如何なる處にもこの御文をはぶいてお置きになることがない。本願をお書きになる所には、必ず之を書いてお置きになる。

八　して見るとこれは恐らく、釋尊の此世に來り、教え給ふ所は此の御一言にあるとの思召であらうと頂かして貰はれる。さすれば私共に於ても、釋尊の御教化はこの抑止の御一句であることを確り頂かして貰はねばならぬ。言ひ換へれば三世諸佛の御慈訓は、惡は仕てならぬとの嚴しき御誡めであるといふとである。處て茲に遺憾ながら、何としてもその教えに隨ひ得ざる私共といふものになつて來る。茲て問題が起つて來るのである。之から先きが問題なのであります。

眞宗の人に抑止の意が徹底して無い

息子が入らざる物を買つて來た。こんな物を買つて來ては仕やうが無い、と嚴しく誡めて、「買つた處へ返しに行け。然しそんな處へ行くのに汽車賃は遣れぬから歩いて行け。」そして母親に「歩いて行かすのだから握飯を作つて遣れ。」子供は仕方が無いから握飯を貰つて泣く／＼出て行つた。あとで母親を呼び寄せて「お前汽車賃をやつたらう。」遣つては叱られやうと思つて遣りませぬでした」と言はれると、計らんや「この馬鹿め、俺はあ一言つたけれど、お前が遣るだらうと思ふて居たに」と叱られたといふ話である。

一二　一方に汽車賃は遣れぬと言はれた嚴父の誡めは、極りなく激しい。そこになると現に親鸞聖人は、御子様の善鸞上人が、お慈悲の眞意に背かれた爲め勘當なされた。そこは飽く迄嚴しいが、それは是が非にも押つけて其者を絶対にいかぬとある嚴しさでは無いのである。その裏に、母に金を渡したかと聞く父の意はその許す可らざる惡事であるが、それを仕でかした小供の身が彌々可哀相で、如何にしても捨て切れざる親心である。これが佛本願のお意であります。

一三　全體從來眞宗の信者には、釋迦の抑止は方便で

ある、あれは取去りてよいのだといふ聞き方があつて、折角涙の籠つた釋尊のお誠めを初めから馬鹿にしてかゝる風がある。「なに父はあんなに言ふも、母は屹度金呉れる」と、これで父の意も母の意も分らぬやうなつてゐる方が多いのである。

一四 抑々釋迦慈父のお意にする時は、何處迄も私共を善くさせて行き度いが腹一杯である。私共としては何處迄も戒定慧三學を守つてゆかなければならぬが、釋迦の遺法、諸佛の通誠である。凡そ人として善く出来無くてよいといふ法の有る可き筈が無い。爾るに末法の時に於て、その守らんならぬことが、守り得ざる私共といふ者が出来て來た。茲に於てその守り得ざる私なることを豫て知召し、その者の爲めに特別の思召より現はれ下されたが、唯一南無阿彌陀佛のお救ひである。故に一方にこの眞地目なる方面が無くては、本願の有難味は頂け無いのである。現に私如きもこの慈悲を知らせて貰ふたといふは、畢竟このせんならんことに力を失ひ、自分の立場に行き詰つて、初めて頂かせて貰ふたのである。

「善くなり度う」と「悪くてもよく」と

一五 そこで今日の道を求める方には両面がある。從來眞宗の教えを聞きつけた傍と、新に理想を持つて立つて行かうとする青年諸君の傍と、この二つである。兩方共に茲はよく聞き取つて頂かねばならぬ。

一六 青年諸君にすると、眞宗の教えは何程罪惡救済と聞かされても、元來の本意が出来る丈け善いことを仕度いに在る。故に仕度い／＼と、この點より言ふ時は五善を求め五惡を避ける立場にある。殊に求道といふことを標榜して來る人の總ては皆な之である。而して實際に於ては夫れが出来てゐるかといふに、否一つとして本當に行かぬのに皆な泣いて居られるのである。私なども之には實に血涙を絞つた。青年者の多くも絞つて居らるゝことゝ、この點には私は十二分の御同情を持つ。

一七 すると一方聞きつけてる側の人は、頭から「そんなこと出来るものか、出来る位なら凡夫で無い」と口先き丈けては直ぐ然ふ言ふ。して本當に安心できるのかといふに否、實際は「自分はこんな善くして居るのに、人が／＼」と思ふて居る。心の底では絶えず「自分はよく仕て居る」否「せんならん」と思ひつゝ、聞

く時丈け「悪くてもかまはぬのだ」といふ聞きやうである。これでは何處迄いつてもきまりのつくといふことが無い故、餘程よく氣をつけなくてはならぬ。

一八 猶ほ之が色々の形式をとつて現はれて來る。中には法を求め、安心を求める爲に、『もつと善くならんならん』と言ふ人がある。「もつと喜ばなければならぬもつと徹せねばならぬ」と。之は一應他の善事を行ふ爲めに苦むとは違ひ、信仰の爲めであるから、自力作善とは別の様にあるけれども、之が矢張り同じである。

一九 全體人間は妙なもので、筈の皮をむくやうに、同じことを何時迄も繰返す。初めは世間的に善く仕度いと考へて、それでは可かぬから次には理想的にと企てる。次には「それも宗教でなくては可かぬ」いや宗教は他力でなくては「信仰を得なけりや」、終に最後には「頼み心が何うぢや、後念が何うの」と、結局ちつとも善く仕度い心の外に無いのである。昨日も或る方が「自分は信仰は頂いて居るが、頂いた上の心持が聞度い」と言はれた。私は言下に「心得を聞かんならんやうで、頂いたと言へるか」と申上げた。人間は誰しも皆な同じとて苦しんで居るのである。信仰問題に

苦しんで「頂かんならぬ／＼」といはるゝは、結局「よくせんならぬ／＼」といふと、些の違ひも無いのであります。そこでこゝになるともう人間は取る可き道が無い。こゝで行き詰まる。何うにも斯うにも仕やうが無いことになつてある。

二〇 處が今の聞き慣れの側の人は、初めから「人間がそんなに喜べるものがあるものか、喜べぬ儘ぢや、惡いま／＼ぢや、疑ひの儘お助けぢや」と、言葉にお助けを引つつける丈けて、その實安心にも何にもなつて居らぬ。屹度この二種類がある。これを現代で言ふと、即ち一つは修養風、一つは「仕やうが無いから有るが儘勝手にやれ」といふ流儀である。如何なる人でも必ずこの何れかになりてある。

二一 殊に私が之を言ふのは、今日世の中に於て、眞地目なる青年が、努力奮闘、而も如何程努めても思ふやう可かぬので、血涙を流して泣いて居る側の人があゝる。それらの方々に深く同情すると共に、一方眞宗の人が「此の儘ながらのお助け」と、これで自分では頂けた積りて居て、その實ちつとも頂けて居らぬ。其儘もとの處にちつとして居る。「岸上に登れぬ／＼」と言

ひつゝ、今日自分が沈んでいくことも知らずに居る眞宗一流の人に、深く氣をつけて貰ひ度いのである。

二二 これは少しく氣を附けて見らるゝと、現在日本の社會も皆之になつてある。一面に眞地目に／＼と、嚴格なる道德主義、努力主義が盛んに唱へらるゝ半面に、それで何程遣りて見ても、何うにもならぬ處から、一方に悪いまゝ平氣で押さうとの主義が頻りに行はれて居る。而して之が頻々社會上の事實となつて現はれ、兩者爲めに苦しみを極はめて居るといふ有様にある。終に何處さがしても阿彌陀佛の本願は影だにも見當らぬ。イヤ今日は眞宗が盛である。なに宗教界と言はず、一般社會と謂はず、眞宗など一つもありは仕無い。滔々として悪くてもよいといふ横着主義と、出来る丈けよくやらうとの律法主義で、行き詰つて居るといふ現狀であります。

二三 そこへ持つて來て、今斯く私共が、如何にしても眞地目に行ひきれず、正しくなり切れ無い、結局苦むより外無い、性分を豫て哀はれと見て置いた、その爲めの親が特別の心配であるぞと、現はれ下されたが實に彌陀の本願との事であります。故に「悪くてもよい

のだ」であつてはならぬ。悪い爲めに斯く詮方盡き果てゐるのである。一方に「そのやうな者故、一文も金はやらぬ、五十二段走いて行け」と厳しき父の誠めを受け、最早や起ち上る力も失せ果てゐる御同やうなのである。爾るに茲に思ひ懸けなく、大悲の母現はれ、「その汝の腑甲斐なきは兼ねて見て置いた。その爲めに母がかねて用意して置いた故之をやるから、汽車に乗りて行け」と、この腑甲斐なき奴をば飽く迄下からかばつて下さる母の御心である。一度びこの御心に接する時は、私が腑甲斐無いのがそんなに迄可哀相で御心を痛めて下されたのであつたか、難有いと、今迄眞地目に行へる氣で居た者は、その長々の高貴の心を恥ぢ、悪くても善いて腰掛けて居た者は、その横着を心から畏れ入り、この慈悲一つに腹底より満腹して、茲に初めて人生を超絶させて頂けるのであります。

口繪説明 口繪二葉の寫眞は落慶式當日三圓隆次氏が撮影寄附せられたるものにて、第一葉は當日祭式中に外部より正面玄關をうつしたるもの、又第二葉は既に式開始せられ、長尾氏の挨拶がすみ、會主が壇上讀文を拜讀し、一同之に應じて蝶誦奉讀中の光景なり。

肅啓、求道會館落慶式之節は、態々御來臨の榮を辱うし、又御祝電御祝詞を賜はり、欣幸の至に奉存候。早速御挨拶可申上筈之處、多忙に取紛れ延引申譯無之、茲に虔て御禮申上候。猶其節御丁寧に御祝儀を頂戴仕恐縮之外無之候。御好意に甘へ、謹て會館寄附金中へ拜受仕候間左様御了承被下度候。

頓首

大正五年一月

近角常觀
世話人一同

求道會館建築寄附金第拾四回報告

式禮儀儀總額

一金五百四拾圓也

一金五百五拾圓也

內譯

金百五拾圓也 銚子 深井吉兵衛殿
金五拾圓也 野田 茂木佐平治殿
金貳拾圓也 日本橋 岡田九八郎殿
金五拾圓也 同 岡田多つ子殿
金貳拾圓也 同 岡田泰吉殿
金貳拾圓也 同 岡田かめ子殿
金拾五圓也 同 森田 恒一殿
同 同きやう子殿
金七拾五圓也 同 岡田 政由殿
金百五拾圓也 同 岡田小三郎殿

一金四百四拾壹圓也

內譯

金參百圓也 日本橋 岩田作兵衛殿
金五拾圓也 京橋 橋本忠次郎殿
金五圓也 府下 長屋ヒサ子殿
金貳圓也 同 増田 玉子殿
金壹圓也 日本橋 繁山 惠司殿
金參拾圓也 京橋 三間 隆次殿
金貳圓也 府下 細野 純弘殿
金壹圓也 同 富士田昇浩殿
金五拾圓也 同 岩田 淳子殿
一金參百五拾圓也 同

內譯

金參百圓也 芝 成瀬 正恭殿
金五拾圓也 佛具料 芝 成瀬 淺子殿
一金壹百拾參圓五拾錢也 長谷川若子殿

內譯

金壹圓也 若松 前田 利行殿
金壹圓也 福島 二瓶 一殿
金貳圓也 同 小林 惣吉殿
金貳圓也(第參同) 若松 中野 善藏殿
金貳圓五拾錢也(第二同) 林 恒 吉殿
金貳圓也(第二同) 同 原山金四郎殿
金參圓也 同 福島 長藏殿
金五圓也(第二同) 同 林 直 八殿
金拾五圓也(第二同) 同 金成 辨吉殿

金壹圓也

金壹圓也

金拾八圓也(第二同) 同 星野嘉左門母堂殿

金拾圓也(第二同) 同 林 龍三郎夫人殿

金五拾圓也(第二同) 同 林 龍三郎殿

金壹百圓也 芝 和泉鐵次郎殿

金七拾圓也 大崎 小林嘉平治殿

金五拾圓也 本郷 本多辰次郎殿

金五拾圓也 淺草 野澤なかり殿

金五拾圓也 府下 桑原 光子殿

金五拾圓也(第二同) 小石川 今井 喜八殿

金五拾圓也(第二同) 府下 高楠順次郎殿

金五拾圓也(第二同) 府下 吉田 靜致殿

金五拾圓也 本郷 千野要之助殿

金五拾圓也(第二同) 府下 片野鐵次郎殿

金五拾圓也 同 秦 敏之殿

金五拾圓也 同 平田 榮二殿

一金四拾貳圓也

府下

東京モスリン會社有志御一同殿

一金四拾圓也(第二回)福岡赤松やそ子殿

一金參拾圓也大分無名氏殿

一金參拾圓也(佛具料)麴町高松きみ子殿

一金參拾圓也(第二回)本郷高橋宗一殿

一金參拾圓也大阪麻生二郎殿

一金參拾圓也

内譯

金五十錢也秋田木村謙治殿

金五十錢也神田渡利豐敏殿

金五十錢也谷口勇三殿

金十錢也出口貞作殿

金十錢也秋湖殿

金十錢也今以森次郎殿

金壹圓也古屋大松殿

金五十錢也坂本源金殿

金五十錢也雁金殿

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金三十錢也

金十錢也

金十錢也

金參圓也

金五十錢也

金五十錢也

金五十錢也

四

堀内亮殿

大室福太郎殿

永井直次殿

島野德太郎殿

伊藤次殿

少次殿

古屋善七殿

喜多志滿榮三郎殿

松屋吳服店地方部

羽木友二郎殿

神谷殿

山村房吉殿

思田金太郎殿

三河屋殿

山内岩雄殿

塚本豐吉殿

服部宗吉殿

山田鐵之助殿

すゝ嘉殿

長澤勝二郎殿

高橋松藏殿

古屋富一郎殿

古屋文子殿

古屋すみ子殿

古屋千代子殿

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五

金十錢也

金五十錢也

金五十錢也

金五十錢也

金壹圓也

金壹圓也

金壹圓也

金二十錢也

金貳圓也

金五十錢也

金五十錢也

金五十錢也

金貳圓也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

金二十錢也

小野敏雄殿

今井悌三殿

森谷弘助殿

長澤勝二郎殿

高橋松藏殿

古屋富一郎殿

古屋文子殿

古屋すみ子殿

古屋千代子殿

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一金貳拾圓也	同	古崎	彊殿	一金拾圓也	本郷	黒川	瑤技殿
一金貳拾圓也(第三回)	府下	板橋	盛俊殿	一金拾圓也	前橋	河野	貞治殿
一金貳拾圓也	京橋	尼崎御一家殿		一金拾圓也	東京	俵	久子殿
一金貳拾圓也	同	青木五兵衛殿		一金拾圓也	府下	松村	德松殿
一金貳拾圓也	臺灣	船越嘉三郎殿		一金拾圓也	東京	眞宗關東會殿	
一金拾五圓也	本郷	内堀 健造殿		一金拾圓也	芝	佐竹	觀海殿
一金拾五圓也	同	杉野芳太郎殿		一金拾圓也	東京	平尾義次郎殿	
一金拾五圓也	府下	登坂 秀興殿		一金拾圓也	麻布	村上 義一殿	
一金拾貳圓五拾錢也(第四回)				一金拾圓也	京都	藤谷	竟殿
一金拾圓也	神田	無名氏殿		一金拾圓也	京橋	中谷	德恭殿
一金拾圓也(第二回)	大崎	葦原 雅亮殿		一金拾圓也(第四回)	岡山	渡邊	元一殿
一金拾圓也	神田	柴山 清一殿		一金拾圓也	福岡	峠	忍子殿
一金拾圓也	日本橋	宮本 庄七殿		一金拾圓也(第二回)	仙臺	宮島	信吉殿
一金拾圓也(第二回)	淺草	今井彌五郎殿		一金八圓也(第二回)	本郷	鈴木	龍司殿
一金拾圓也	本郷	杉野きん子殿		一金六圓也(第二回)	山口	三井誠之進殿	
一金拾圓也	小石川	嶋地 大等殿		一金五圓也(第六回)	麴町	石山須磨子殿	

一金五圓也	日本橋	伊藤きく子殿	一金五圓也	神田	春田	萬二殿
一金五圓也	本郷	小川 倉吉殿	一金五圓也(第二回)	麴町	藤井	幸植殿
一金五圓也	芝	福田 嘉苗殿	一金五圓也	麻布	大井才太郎殿	
一金五圓也	同	夫人殿	一金五圓也	熊本	森田 與平殿	
一金五圓也	小石川	高島 圓殿	一金五圓也	小石川	無名氏殿	
一金五圓也	同	百目木智璉殿	一金五圓也	京橋	水野きよ子殿	
一金五圓也	府下	無名氏殿	一金五圓也	小石川	小原 よそ殿	
一金五圓也	府下	福地 茲憲殿	一金五圓也(第二回)	東京	スクッバ夫人殿	
一金五圓也	福岡	有田喜太郎殿	一金五圓也	福岡	中村 大吉殿	
一金五圓也	相州	神林 周道殿	一金五圓也	仙臺	土井 村上殿	
一金五圓也	東京	近藤 泰圓殿	一金五圓也	東京	平尾 次郎殿	
一金五圓也	同	法友 會殿	一金參圓也	淺草	高橋寅五郎殿	
一金五圓也	本郷	種田朝太郎殿	一金參圓也	本郷	高島 藤作殿	
一金五圓也	同	種田荒次郎殿	一金參圓也	神田	三好 榮光殿	
一金五圓也	同	内堀桑次郎殿	一金參圓也	小石川	白井 成允殿	
一金五圓也	同	富山 縣人殿	一金參圓也	吳市	牧里 春子殿	
一金五圓也	山口	林 和輔殿	一金參圓也	岐阜	河谷民次郎殿	

一金參圓也	島根 湯淺慎次郎殿	一金貳圓也	仁川 矢野なを子殿
一金參圓也	小石川 佐藤 勇吉殿	一金貳圓也	福井 蘆野 修一殿
一金參圓也(第七回)	府下 岡部 民子殿	一金壹圓也	下谷 村上くま子殿
一金參圓也	小笠原島 森脇 忠市殿	一金壹圓也	本郷 梶間濱次郎殿
一金參圓也	岐阜 杉野 惣一殿	一金壹圓也	三河 杉浦鮑五郎殿
一金貳圓也	芝 原 京子殿	一金壹圓也(第二回)	巢鴨 増子 賢慧殿
一金貳圓也	本所 中田源次郎殿	一金壹圓也	本郷 丹羽 鐵一殿
一金貳圓也	日本橋 酒井 千代殿	一金壹圓也	同 神戶 榮作殿
一金貳圓也	横濱 伊藤 達殿	一金壹圓也	同 赤尾 鐵藏殿
一金貳圓也	山口 小林 治橋殿	一金壹圓也	同 荒川 桂達殿
一金貳圓也	同 かね殿	一金壹圓也	同 水谷告次郎殿
一金貳圓也	房州 蓮岡 法麟殿	一金壹圓也	青森 木村 啓助殿
一金貳圓也	撫順 太田 龍治殿	一金壹圓也	本郷 村本三太郎殿
一金貳圓也(第二回)	讚岐 神谷 淨因殿	一金壹圓也	撫順 泰穴 ステ殿
一金貳圓也	新庄 宮崎 勝江殿	一金壹圓也	同 無名氏殿
一金貳圓也(第二回)	麻布 青木 正勝殿	一金壹圓也	鹿兒島 鬼塚 和計殿
一金貳圓也	同 ふて殿	一金壹圓也	小石川 柴田甚五郎殿

一金壹圓也	會津 須貝たき子殿	一金五十錢也	本郷 赤尾密次郎殿
一金壹圓也	深川 高橋金之助殿	一金五十錢也	同 石垣りう殿
一金壹圓也	長崎 横手やす子殿	一金五十錢也	同 無名氏殿
一金五十錢也	本郷 羽根田藤七殿		

總計金參千五百八拾圓也

累計金貳萬壹百拾五圓參拾七錢也

右之通りに候也

大正五年一月五日

世話人總代 長尾 善收 西澤 七一

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて感謝候也

近角 常觀

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候
 當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の
 文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候
 二、寄附金領收の節は近角常觀より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候
 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

袖珍美本	郵稅四錢	定價二十錢
------	------	-------

版五第

定價三十錢
郵稅四錢
袖珍美本

第二章 悲觀思想と信仰
第五章 社會問題と信仰

第三章 倫理力行と信仰
第六章 國家秩序と信仰

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

昨年求道會館落慶式當日來賓諸氏の中にて館内に於て金拾圓遺失有之り御預り申置き候間御心に當りの方は當方迄御申出被下度候也

定價
三錢
六冊
二錢
施木
用小
冊子

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

注意 本誌前號より誌代改正致し候間別項定價

表御一覽願上候

東京市木郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

每日嚙午前八時

求道日曜學校

求道會館

大正五年十一月十七日發行

印編發
刷輯行人
白近近
土角角
幸常常
力音觀

發行所

東京市本郷區森川町一番地
求道發行所

大賣捌所

東京市神田區	東京市南區	同大阪府南區
東	北	德
京	永	永
隆	趣	趣
西	西	西
文	文	文
堂	館	庫

規定

本誌は毎月一回十日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本紙の代金は可成替貯金口座にて御送金なり
郵便爲替にて御送金の節は爲替振替局は必ず「本郷森川町郵便局一宛の事」
郵券代用の節は一錢切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一帯地求道發行所」とせらるべし
節の購置者は住所姓名を詳細に横書にて申送らるべく、轉居の節は郵便所所の宿明を通知する事
回答を要せらるゝ方ば相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

金拾參錢	金壹錢	金八拾錢	金壹圓五拾錢
一部定價	一部郵稅	六ヶ月郵稅共	一年郵稅共

●廣告料五號活字一行、二十六字詰、一回金拾錢

浪替口座東京一六六九六番

講 話

每日 午前九時
求道學舍

(本郷區森川町一番地)

每土曜午後二時
第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

每月二十七日午後七時
第三求道會
(日本橋綱敷町脱教所)